

經濟學

* 杉村廣藏・二本保茂 經濟哲學 (昭八・二、改造社、四六判四五〇頁、豫約) 經濟學全集第九卷、杉村教授の著作は「文化價值主義の經濟哲學」(三一三〇頁)と題す。「經濟哲學

について、故左右田博士の思想を中心とした一つの概説」(はしがき)である。序説のほか、三章より成る。第一章文化價值の妥當の問題(1) 獨逸理想主義哲學(2) 西南獨逸學派(3) 左右田學說(4) 特殊的文化價值、第二章經濟的文化價值の理論(1) 經濟哲學の問題(2) 貨幣概念中心論 A 經濟學の發達と貨幣概念 B 貨幣概念の構造 C 經濟價值論の問題 D 限界概念としての貨幣概念(3) 經濟學的認識の論理 A 認識目的 B 史學認識論 C 經濟法則の論理 D 經濟學の構成(4) 經濟的文化の諸問題 A 經濟的文化 B 政策の観点 C 階級對立の問題 D 協同體倫理、第三章文化價值思想の批評(1) 極限概念の神祕(2) 人格主義の限界(3) 經濟的文化の特質(4) 結語。——著者は左右田博士門下にして左右田哲學の繼承者、

また批評者でもある。その批評は本書目次の第三章が示すごとくである。「經濟」を哲學的に意味づけることは容易ならず、「眞に經濟を哲學したと思はれる見解」を述べた建設的業績はまだ世界的に乏しい。わが左右田博士こそ、その第一歩をふみだしたものであるといふのが著者の見解である。少くとも初めて「經濟哲學」といふ一名稱を普及せしめたことにおいて、左右田博士はこの國の經濟哲學史の第一頁を飾る存在であるが、「經濟哲學」と名づけられるものの實質がどう將來變化するであらうかは選に豫測をゆるさない。したがつて左右田博士の「經濟哲學」が、いかなる地位におちつくべきものか否かは、かかつて繼承者の態度と能力によるものが多い。杉村教授は、この意味において、左右田哲學のまたなき擁護者といへるであらう。經濟哲學は、經濟生活にたいする一つの解釋たるにとどまるべきにあらず、一方には理論經濟學にたいする批判たるべく、他方には「經濟的文化」にたいする實踐的指示たるべきだといふ。左右田哲學はまさにさういふものだといふのである。だが、左右田哲學は

もとより獨逸理想主義哲學の一本の枝にすぎず、その理想主義哲學自体がすでに死に瀕してゐる情勢において、いかにして之を守りたててゆくか? 杉村教授は悲壯な言葉を發して、「流行哲學にあらざれば語るも無益なるべきは、自らの生活に根柢をもたぬ思想の横行に寧日なき吾が思想界、學界の情勢のもとにあつていふまでもなく明かである(圈点は解題者)ともいへる。左右田哲學が「流行おくれ」のそしりに會ふべきを豫想した言葉のごとくであつて、往時を知るものには多少の感慨を湧く。では、ここで「自らの生活に根柢をもたぬ思想」とはいかなる思想を指すのであらうか? 答は後に明かになり、それは「唯物史觀的經濟哲學」などを指すもののやうである。吾々は日常の經濟的實踐のうち、に人生的意味の深さを語らなくてはならない。唯物史觀はあまりに「科學」を宗教化したために、實踐を科學的に觀ることに失敗するとともに、宗教的なものを失ふことになつてゐる。」(圈点は解題者)などといふくだりが結語の一節に見える。では「日常の經濟的實踐」とは何を意味するか? さう

いふ、肝腎なところが一つ説明されてゐたら、著者の「生活に根柢を」もつた思想だの、生活の「實踐的指示」だのといふものがどんなものか、判明したであらうが、さういふ讀者の要求は報いられてゐないやうである。しかし左右田哲學の批評においては、それが獨逸理想主義の「一般的な神祕論的信條を逐ひつめ、極根概念の神祕にまで凝集せしめた觀がある。而して左右田哲學の發展は、この極限觀念の神祕を合理化することにあつたといつてよい。」といふ明快無比な解釋を下し、つづいて「思惟にとつて非合理であり、『論理の眞空』ともいふべきこの神祕を克服するための努力は、その課題であつたわけであるが、その超点はまた同時に文化價值主義よりの脱化を約束するものであると考へられる。それは、獨逸理想主義の運命ともいふべき神祕論的思想よりの離反とならずにはゐられないからである。」(一一三頁)と突きあててゐる。

にスポーツの協同體倫理をあげたことは、ややもすれば、不平等個人主義に基づくロマンティックの倫理觀にかへらんとするものがある。」といひ、「協同體倫理を説いて、人格主義の形而上學に陥るに於いては、左右田學說も亦、つひに文化價值主義の通則たる神の子の人格主義によつて支持せられるものといふの他はない。」(一一七頁)と突放す。いはゆる經濟的文化價值を他の特殊的文化價值なるものと並列せしめた左右田博士の構想については、その論理的根據を一應認めながらも、なほ疑問を挟み、經濟的文化における認識論的表徴としての貨幣概念については、一つの修正意見のあることを暗示してゐる。その修正意見については同教授論文『貨幣中心論』に對する修正の試み『福田徳三博士追憶論文集、一九三三年』を見よ。いはゆる左右田學說はこの國には珍しく獨創的な、輪廓のあざやかな、一時的影響の大きな學說であつたが、それだけに始末のつきやすい學說でもあつた。本書は、その學說が有能な門下によつて殘す隅なく噛みくだかれ反芻しつくされた姿であり、遺された何ものもないといふ。

一二三

觀をあたへてゐる。それが左右田博士にとつての幸福であるか不幸であるかはわからないが、讀者にとつての幸福であるのはたしかである。左右田博士における文體の莊重と行論の峻嚴味は緩和されてゐるが、文脈の上に酷似した點の認められることも興味がある。近代の日本における學問傳承の珍しい一事例と見てよからう。——二本保幾教授の著作は「經濟學に於ける若干の哲學的問題」(一二三—一二七三頁)および「左右田博士の經濟哲學に對する解説及び批評」(三七五—四五〇頁)と題す。前者は四章より成る。第一章經濟學的概念の問題、(1)關係的概念と絶對的概念(2)ゲオルグ・ジンメルの價值論 A 價值一般 B 經濟價值(3)時空の相對的綜合、第二章經濟概念と一般理念(1)經濟理念と經濟の全体(2)カントの自由理念の論理的性質(3)經濟理念と其の社會的反映、第三章經驗法則と觀念型、第四章經濟範疇と先驗的方法。後者は二章より成る。第一章經濟學認識論上の問題、A 經濟學を歴史的文化科學なりとする論據に就て B 經濟學の所謂先天的概念に就て C 經濟法則の論理的性質に就て、第

二章經濟形而上學の問題、A 經濟學認識論と經濟形而上學との關係に就て B 價値の體系に就て「後記」によると、前者の前半は「哲學講座」(近代社)に曾て發表されたもの、後半は早稻田大學出版部發行の講義録に掲載されたもの、(前後の聯絡をつける爲に若干の改削がおこなはれてゐるよし)後者は「大思想エンサイクロペディア」(春秋社)所載のものであるといふ。いづれも舊著に關してゐるので、ここには解題を省く。著者は明治二十五年長野縣に生れ、「大正三年早稻田大學政治經濟學科卒業、大正四年十月より大正七年一月まで東京朝日新聞の政治經濟部に記者たり、大正八年十一月早稻田大學の命により米國に、次で獨佛に留學し主として經濟學を研究し、大正十一年四月歸朝、早稻田大學政治經濟學部の教職に就き現在に至る。」

*高木友三郎 生の經濟哲學 (昭八・七、森山書店、初刊、序文凡例目次三頁、本文五一〇頁、跋文六頁、索引(事項人名引用著書書名)二四頁、附録)。

この書物の根本思想をかいつまんで、著者は序文にいふ、「經濟は目的實現に役立つ手段即ちものの機能・效用とその效用實現

に必要な第二次的手段たる費用といふものの組合はせを比較して差引計算が可能なる場合に、その最大差額を求めんとする場合の活動である。……效用なる觀念を無限の彼岸に蒸溜してゆくと、その極限概念として客觀的に理想的な純粹效用なるものが想定せられる。又その費用なる觀念を無限に切下げてゆくと極限概念として客觀的に理想的なるものとして無費用即ち費用零化が想定せられる。その結果は費用・效用の差額が無限大となるが、これこそ正しく經濟活動の理念でなければならぬ。斯る經濟的理念の到達は即ち生の内容そのものの無限擴大を招來し、ここに「生」から「より善き生」への躍進を見んとするのが本書の根本趣旨である。」と。左右田博士は認識論に「深入り過ぎて」經濟哲學を「系統化」することができなかつた。本書は、新カント派の價値哲學の形式から暗示をえながら、内容を生物學的進化論に求め、「動的生命の經濟哲學」を「系統化」したものであるといふ。著者は脱稿後において「畏友諸氏に示して教へを請ふた」結果、つぎの諸点に問題若くは研究補正すべき餘地あるこ

とを發見したといふ。(1)哲學一般の形式を特殊科學たる經濟學に取入れ、認識論から理念論までを研究對象とすることは妥當なりや。(2)本書における自然法則と規範法則との關係は果して妥當なりや。(3)經濟概念論に説ける哲學的認識論と經濟學上の認識論との連鎖不十分である。(4)哲學的價値論と經濟的價値論との聯絡が不明である。その他二三である。そして本書の完成には、木村増太郎博士、舞田長五郎教授、小野武夫博士、杉本潤一郎教授、小西憲三教授、友岡久雄教授、岸本誠二郎教授、三木清氏、赤杉要教授、高田保馬博士等の示教に負ふところが多しとされるされてゐる。さて、經濟學は、著者によれば、他の社會科學と共に歴史と自然科學との間に位し、「個性則兼・普遍則發見の學」である。田邊元博士の科學分類表における經濟學の地位こそ妥當である。經濟哲學は「現象の意味の見方の形式を哲學に借り、その内容を經濟學に探り、之を鑄固めたもの」である。(四九頁)經濟本質論においては、著者はみづからリフマン説に近似すると稱し、たゞし「リフマンの如く快樂單本位の人生觀に立た

ざるが故に筆者の小費用・大費用の剩餘説は、その内容が個人的にも社會的にも將又時代的にも多角的であつて必ずしも一定内容に囚はれず、偶然性の廢棄淘汰と必然性の發揮展開によりて、その内容は進化的に合理化して小費用・大費用の差額價值並びに合理的效用のみが勝ち抜き、勝ち残りて、遂に經濟理念の實現を見るに至る点に於て何人とも異なつてゐると云へるであらう。」といふが、論旨の理解は容易でない。

推理の必然的過程が示されてゐず、具體的な例解が欠けてゐる。經濟價值の問題について、「經濟價值の内容が他の文化價值よりも複義的な結果として立場の如何により或ひは效用を以て經濟價值の本質なりとし或ひは費用を以て經濟價值の本質なりとし或ひは兩者を折衷し費用・效用を以て經濟價值なりとなし抗爭久し(き)に及ぶも未だ決しない。」といふは、費用學說・利用學說の歴史的對立を指摘してゐるものとおもはれるが、交換價值・使用價值の語義(概念)の變遷發展を問はずして、「經濟價值」といふやうな漠然たる用語の上に安息してゐるのはどうか。これはこの書物にかぎら

ず、今日まで「經濟哲學」と稱するものに共通の弱点でもあらう。だが、「勞働價值説も效用説も若し經濟現象を或る靜態に止めて觀察するならば何れも成立の餘地あるのみならず、實は兩者は相ひ表裏してゐるのである」といひ、兩學說綜合の可能が明言されてゐることも注意したい。概して第三篇經濟價值論は、諸學說の紹介的記述、解釋、および著者の獨創的立言の相互的關聯が曖昧であり、一個の見解に立ち、その見解を貫徹した趣きに乏しく、おほむね羅列的であり、著者自身の所説は、たゞ羅列の一追加たるにとどまつてゐるといふ憾みがないでもない。「ブハーリンは限界效用説を金利生活者の經濟(學?)としたが、筆者は此他に之を消費經濟者サラリーマンや主婦の經濟學と看做し、勞働價值説を無產階級の、生産費説を生産者殊に自由資本主義時代の價值論とし、わが高田博士やツガンやシュトルツマンの富の分配は社會勢力によるとする社會價值説・價格勢力説を以て獨占資本主義時代の經濟學と看做し、折衷説を以て勞資協調の經濟學と看做さんとする者である。」といひ、「然り而して筆者の

一三四

差額價值説は何を意味するか。筆者未だ自ら知らない所である」と結ぶがごとき、著者の明瞭無邪氣なること驚嘆に値するものがある。著者は自己の價值學説にみづから「差額價值説」なる名稱をあたへ、(1)客觀價值説(2)主觀價值説(3)折衷説のつぎに來たる第四位の新學説とし、これを産みおとすと同時にその名を過去帳に記入し、いはば歴史的存在を保障したかの觀をあたへてゐるが、かかる所置は一部の讀者にやゝ無邪氣にすぎたる感をあたへるかもしれない。過去の三學説のために百ペーヂを費すよりは、むしろ自家の新學説の詳述にこそ百ペーヂを費すべきであらうに、この著者が自己の新學説のために費すところ十ペーヂにすぎないのは奇異である。「差額價值説」は折衷説の「變形」だといふが、この派に關するものとしては、すでに日本にすくなくとも福田德三博士・宮田喜代藏教授の兩學者が存在するのであるから、高木教授がまづ右兩家の所説を吟味批判し、そのうへで自家の所見を積極的に詳述されたなら、大いに讀者の興味をそゝるものがあつたかもしれない。著者自身の理論体系を示

すべき肝腎の一章に及んで、あだかも他人の學說の適要を紹介することがこき態度で、行論をかたつけてゐることは、著作の主旨にそはず、全体として獨創性を強調するかかる著作の構造としては、不満足を感じしめる。さきの經濟本質論における「差額價值」の説明と後の經濟價値の理念における「純粹效用」の説明を併讀してもその不満は消えない。著者が廣大な展望および廣大な規模においてこの著作を完成しようとした意氣は旺んなものであつて、高垣博士のいはゆる壯大な構圖にちがひないが、一般に行論が粗略で自家の推理を確實に展開せしめる勞を惜んでゐるきらひがあるのは遺憾である。「純粹效用」「絶對的普遍安當の效用」「最高の必然的效用」「永劫の後に發見さるべく期待される最合理の超越的效用」等の用語の意味内容は、いづれも判然しない。高垣博士のこの書物の批評に、「我が學界はこゝに始めて、体系づけられた經濟哲學を興へられたのであるが、著書にありてはその課題は、左右田博士における如く、經濟學の學としての反省といふ如き狭いものではない。又必ずしも經濟學的理解

を深めんとするものでもない。より善き生への躍進を基礎づけんとする、福祉政策的色彩の濃やかな、著者の哲學經濟學の全体系である。この書をひもとくものは何人も博士の明瞭な文章に引かれて、氣輕い裏に大きな問題を考へさせられるであらう。〔圖点は引用者〕云々とあるのは、親切でもあり、この書物の全体的な感觸をいひあてたものである。

*小泉信三 マルクス死後五十年（昭和八・七、

改造社、菊判三〇七頁、（昭和八・七）一九三三年三月十四日はカアル・マルクスの死後五十年に相當した。マルクシズム研究家としての著者は、その機會に「マルクシズムの全面に涉つて平生所見の大體を述べて置きたい」といふ志から、書名と同じ表題の論文を書いて、同年三四兩月號の「改造」に發表した。それがこの國で前後して發表されたマルクス記念論文のいづれよりも厭倒的に一般の注意を惹き、ひろく讀まれたことは疑へない。この書物はその論文に加筆したものを主とし、「更に其論旨を補ふべき他の數篇の文」を併せて一巻としたものである。マルクシズムにたいする著者の一貫し

た態度は、その序文にいふごとくである。

「著者は一方マルクシズムに含まるゝ眞實の價值あるものを尊重すると共に他面に於て多分の獨斷、誇張またデマゴギイの其に含まれてゐることを認め、此兩者をば共に忌憚なく指摘し、吟味したいと心がけてゐるものである。本書にして若し此の批評的精神の振作に多少の寄與をなし得るならば著者の此上なき幸である。」いかなる人も、著者の信實を否定しがたい。この書物はいはゆる「思想善導」の目的のために書かれてゐるのでなく、批評的精神によつて、つまり科學者の魂によつて、書かれてゐるのである。著者はいふ、「私はマルクス心酔者ではないし、又度々の機會に彼に對する反對批評を試みた。併し今日吾々同様若くは其以下の年輩の文筆者でマルクスを知らず、又全く其影響を感じないといふ者はあり得ない筈だと思ふ。」また舊著の一節を引いていふ、「苟にマルクシズムには許多の誇張偏頗獨斷矛盾が藏せられて居り、之を指摘することはまた必ずしも難事ではない。併し此等の缺點あるに拘らず、豫言者的直覺と革命家の情熱と透徹せる異常の推

理力とに依つて、さうして之に加ふるに精勵無比なる文獻・涉獵に基づいて書かれた『資本論』は、恐らく十九世紀後半に於ける經濟學に對する最大の貢獻を以て許すべきものであらう。マルクシズムは十九世紀末葉に至つて、獨逸、佛蘭西、英吉利、露西亞等に於ける社會黨の綱領に採用せられ、廿世紀に入つてからは露西亞革命の指導理論となり、一部分は其學問的價值自体の爲め、一部分は此等の實踐的影響の爲めに、現代における社會科學の研究に對する最大の刺戟者となつた。(傍點は解題者)ここに「資本論」をもつて、「恐らく十九世紀後半に於ける經濟學に對する最大の貢獻を以て許すべきもの」といふに見ても、著者の態度の一端は知られるであらう。著者はマルクスが始めは容易に理解されなかつた事情を説明し、そして次のやうにいふ、「マルクスは難解とされてゐる。私は必ずしも其に賛成しない、難解々と稱せらるゝ爲めに、可なり正常平明の解釋が妨げられたと思ふ。讀者の側で素直に納得できないことも、何か深遠な理窟があるのだらうと、考へ過ぎて礙り過ぎて、獨り相撲に類する

解釋を下した例が從來可なりあつたと思ふ。併し何れにしても『資本論』其他の著作が、其結構及び用語の上から見て決して平易な本でないことは勿論である。其理解に年月を要したのも無理ではない。而して潛心熟讀して漸く其眞髓を掴み得たと信ずる者は、先づ其祖述と辯明とに力を注ぐのが當然の順序である。マルクスの死後五十年間に於ける大多數マルクシストの事業は「此の祖述と辯明」とに終始し、少數の例外を除けば未だマルクスから出發しながら忌憚なくマルクスを批評し、其缺陷、不備、誇張、矛盾を指摘して大膽に自家の見解を述べる所にまで到達してゐない。反マルクシストは別として、マルクス主義者側からのマルクス批評は、彼れの死後五十年の今日以後に期待されるべきである。」(五・六頁)——おもはず引用が長きに失したことをおそれるが、かかる斷片を通して、わが著者がいかなる態度の人であるかを知ることができるであらう。いはゆるマルクス主義者に屬せざる學者にして、マルクスを説いてこの國の讀者を傾聴せしめること著者に勝るものなく、マルクスを論じてマルクス主

義者をも傾聴せしめる慨あるもの殆ど著者以外になしといひたい。わけてこの書物は著者の思想の圓熟を示した趣いちじるしく、當時あらはれたマルクス記念論文中の白眉たるのみならず、わが學界近年の好收穫たる觀がある。書名をなす主要論文は以下の十三項にわかれる。前文・マルクスの人物・マルクスとヘゲル・ヘゲルの世界精神とマルクスの物的生産力・マルクシズムと千年王國の信仰・唯物史觀と世界史の究局目標・唯物史觀の一面と革命的實踐・社會主義運動の根據・共產主義必然論・マルクスの社會學に對する貢獻・經濟法則の歴史性・非歴史性・價值論・餘剩價值論・資本家的蓄積法則。——また附隨的な諸論文の表題はつぎのごとくであり、わけて最後の一論は讀者の興味にふれること多大であらう。唯物史觀と共產主義的歸結・價值論上の效用説と費用説・搾取理論の根據・過剩の勞働者と過剩の商品・ソヴェト計劃經濟。これらいづれもの論文が最初に發表された時期および登載雜誌新聞名は、主要論文をのぞくほか、示されてないが、大体最近三ヶ年間のものではないかとおもはれる。

*上田辰之助 聖トマス經濟學 — 中世經濟學

史の一文獻(昭八、九、刀江書院、菊判、圖版五葉、序及目次一五頁、解題二六頁、凡例三頁、本文及附錄三八四頁、索引二二頁) 小序にいはいく「本書は其の副題の示す如く中世經濟學史研究への資料的一文獻を提供せんとするものである。内容から觀れば、聖トム・マージ・ダクキノ(San Tommaso d'Aquino)の經濟學的論說をこの中世哲人の論著より普く蒐集し、夫等を分類し、日つ、可及的忠實に邦語化せんと努めた一のクエレンブーフである。」これは資料篇であり、「如何なる中世經濟學說史研究にも役立ち得るやう編まれたもの」であるが、つづいて同じ著者によつて世に問はるべき聖トマス經濟學研究の姉妹篇でもある。この國の經濟學研究に、從來最も缺けてゐたものは「源泉的文獻の検討」であると考へる著者が、「例へば正統派經濟學の古典に就てさへ、原著書を繙讀するの煩を避け、寧ろそれ等に關する評論的著述の利用のヨリ『手取り早き』を貴ぶ風が一般に行はれてゐる。」と指摘したのは適切である。現代ヨーロッパ語の文獻においてすら、右の有様であるときに、中世

ラテン語をもつて書かれた聖トマスの經濟論が、ここに好箇の研究家を得て、翻譯研究二つながら並行はれる氣運に際會したのは、學界の喜びでなければならぬ。著者がこの書物の出版に關して貢ふところの人の名をあげたのちには、「最後にこの小序は本書計畫の精神を私に鼓吹し給へる故福田徳三先生の御名を逸することは出来な」といふことばがある。聖トマスの略傳および文獻は、つづいてあらはるべき研究篇にゆづられたとあるが、この書物の巻頭には二十六頁にわたる「聖トマス經濟學解題」があるので、これまで聖トマスについて知るところ豊かならざる讀者も、決してまごつくやうなことはない。この書物が一箇の翻譯書でありながら、それ以上の感觸につつまれてゐるのは、一つには聖トマスの論說が一定の角度から拔萃分類編輯され整然たる形態をそなへるにいたつてゐるのみならず、「聖トマス經濟思想のプロファイル」を素描「せんとした右の解題が多くを讀者に語るためであらう。譯出されてゐる聖トマスの著作中の諸節は、Summa Theologiae(神學大全)に關する限り、レオ版全集

中の原文を基とし、レオ版にまだ含まれてゐない他の著述については、使用された版名がそれぞれ關係場所に示され、時によつて、レオ版の原文についても「批判的勘校」が試みられる。現代歐洲語の諸譯書は參考にされてゐるが、「少くとも原文に照し、聖トマスの表現に最も忠實ならんとする努力に於ては拙譯は夫等の何れのものとの比較にも堪へ得ると信ずる。」といふ小氣味よいことばがある。それのみでない。「私は自分の所信に従つて聖トマスの原文の用語及び構造に對して日本語の可能性が許す範圍に於て最大限度の尊重を示し、例へば文章の單複或は能動受動の別の如きは羅和兩文に於て可及的一致せしめたるのみならず、如何なる修辭上の瑣細な單語と雖も、苟しくも聖トマスの筆にしたものは決して之を無視してはゐない。斯くて現出したのが本書に見るやうな一種の文体であるが、私はこの試みを以て甚だしき暴舉と思はす、源著の神韻は到底寫し得ないまでも、却て之により一沫の古典味をさへ湛へ得たのではあるまいかと考へてゐる。」といふことばがある。この書物の内容は第一私有財

産篇、第三財産の使用篇、第三任意的貧困篇、第四流通の正義篇、第五公正價格篇、第六ウズラ篇、第七經濟論策篇の七篇から成る。「私經濟的活動の社會的考察」が各篇に共通なる一特徴である。聖トマスは社會觀は、個人と社會とをその一方に吸収せしめず、個人の立場をも尊重するところの團體主義であり、社會連帶主義とよばれるべきものに屬し、それはかれの協同體社會思想 *Centratisme* と緊密の關係を保つ。この思想を背景として、「職分經濟の提唱とも見らるべき立場」が成立するといふのが著者の最も重要な見解である。「一言以つて蓋へば、聖トマスのいふ職分とは各人の社會的有能性 (*efficientia operis*) に外ならない。」「相互的關心の缺如或は微弱なる機械的の社會分業の思想ならば既にプラトンの國家論にも詳述されてゐるし、除つてはマンデヴィルやアダム・スミスの提唱した全然職分意識なき自利心による自然的調和論のうちにも見出される。またスコラ主義の後を承けて發達せるマアカンテイリズムやフイジオクラシーには其の餘風とも觀らるべき職分思想のなごりを留めてゐるが、

それはいはば中世の傳統に對する *protest* 以上積極的のものでない。……之に反して聖トマスの經濟社會では上は國王 (*rex*) より下は商人 (*negotiorum*) に至るまで凡てが明かに職分履行者である。」「聖トマスは、アリストテレスの教理に基き、流通 (*circulationes*) を分けて自然的にして且つ必要なる交換と、射利を目的とする交換との二種とする。後者は生活充當ではなくて、貨幣の蓄積による致富を目的とするものであり、誹謗さるべきものである。商人は事實上かかる種類の交換に従事する輩であるが、商人の社會的職分は、これを寧ろ第一種の交換たる性質においておこなふことであるといふのが聖トマスの商業職分論である。商業的職分の報酬 (*premiu*) としての利得は、物的、地理的、時間的、或はその他の点における貨物の價值増加に資する商人の努力にたいする手當であるとし、それが適度で、且つ生計の維持、救恤等の目的にあてられるならば正當であると考へられる。この職分觀念を裏づけるものとして、聖トマスには生存權の主張が經濟學の全域を掩うてゐる。」「それは根本的にはア

リスト・テレスに發しアクキノの聖者によつて基督教的に表現された經濟的目的論の立場に關係すること勿論であるが、身分相應の所得にかかはる其の相對的容相が中世職分社會の著しい特徴であることは格別の注意を要すると思ふ。」「(解題一九頁) なるは、所得論における流通的正義と配分的正義、聖トマス經濟學の特質としての合理主義的傾向の吟味があり、また、貧困乃至富に關しては、著者はラスキンの「最も偉大なる先驅者」を聖トマスに見いだしてゐる。

* 吉田秀夫 **マルサス批判の發展** (昭八・九、

弘文堂、獨判序及目次九頁、本文二七四頁、*pp. 274*) おなじ著者の「經濟學說研究——マルサスの人口・歴史・經濟理論」の續刊。前者はマルサスの學說そのものの研究、この書物はマルサス批判の研究である。しかも更に續刊が期待される。兩書において、著者は堀經夫博士に負ふ。「第一に、學史に關する限り最も本源なる第一次の根據によつて立論するといふ方法は、我國に於いては博士が最初に徹底的に採用せられた所であつて、私が不充分なにもかゝる方法を採らうと努め得たのは、一重に博士の御指導によ

るものである。……第二に、假令かゝる正しい方法を採らうと努めても、博士がその貴重なる蔵書を私に開放せられなかつたならば、私はこの方法を採り得なかつたであらう。」(序言二頁) この書物の主題は、マルサスの人口論、歴史理論、經濟理論(この三者が不可分の統一体であることに讀者は注意をうながされる)にたいする批判の歴史的発展を十九世紀末近くまで辿るにある。學史研究の分野では稀に見る周到な、精力的な業績であり、堀博士の研究とひとしくこの國の學問研究の水準をたかめるものである。「要點を概約すれば、(1)マルサスは極めて多くの者と論争を交はしたけれども、而も最後まで食物と人口との兩増加力に基礎を置くその人口論を改變することはしなかつたといふこと、(2)彼れの人口理論を直接に傳承したものは、地代の理論たるマルサス説を資本の言葉に翻譯したといふこと、及び(3)マルサス人口理論に對する否定的批判を試みたものは殆ど無數に存在するが、これ等を詳細に検討する時には、彼れの理論は、その各個々の點に就いては、既にこの時期に覆されて了つたことが知り

得られるといふこと、これである。」(二七二頁) これらのことを論ずるに當つて現れた多くの論點の中、特に注意するべき諸點として、著者が列擧したものはつぎのごとくである。第一に重要なものは、マルサスの理論の基礎たる人口原理は、抽象的な人口増加と食物増加との對比に立脚するものであること、また、かれの推理は、一般的な人口原理から特殊なものへ下向して、これによつて人口三位一體の歴史理論がえられ、ついで資本家社會の經濟理論がえられたといふこと。第二に、右の結果として、人口増加力と食物増加力との對比の可能が否定されたとき、また、上から下への適用といふ方法が否定されたとき、マルサス説は覆されたことになる。事實上、マルサスは夙に覆されてゐたと見るべきである。第三に、マルサスにたいする眞の否定的批判は右の線にやうてのみ行はるべきものであるから、これまでマルサス批判者と稱せられて來た論者の多くは、實はその名に値ひしない。マルサス批判者の歴史的取り扱ひにおける第一の必要は似而非批判者の驅除である。第四に、人口と食物の兩増加力の

對比から出發するものはすべてマルサス主義者だが、かかる理論にしたがふものがすべてかれとおなじ歴史的役割を果たしたといふことにはならない。なほ、この書物で論じ殘された點は、「十九世紀の終末の頃より行はれた所のマルサスの肯定的批判と否定的批判とのより、以上の發展である。其の肯定的批判の發展は、マルサス説を資本一般の理論より特殊的に金融資本のそれに轉化することによつて行はれ、又其の否定的批判の發展は、マルサス説に代位する理論を積極的に樹立し、かくて本書に於いて論じたる如き否定的批判を一体系に綜合することによつて行はれた。」これを辿ることがこの書物の續刊の目的である。(二七三・二七四頁) 開語のほかに五章から成る。第一章「人口論」を繞る論争第一節平等主義第二節人口理論第二章肯定的批判第一節食物増加力第二節食物と資本第三章否定的批判第一節批判の多樣性第二節批判の諸型第四章基礎理論批判第一節人口原理第二節人口三位一體第五章經濟理論批判第一節價值論第二節勞賃論第三節地代論。このうち、第一章はマルサス自身が參加した論争(「

ドウィン、ウォレイ、コンドルセ、ブウス、シイニョア、ウエイランド、グレイアム等を相手としての）を取扱ひ、第二章はマルサスの根本理論は認めつつ細目について修正および發展を要求するもの（ジェイムズ・ミル、マカロツク等）を取扱ひ、第三章ないし第五章は否定的批判（アリスン、ケアリ、ダブルデイ、エンゲルス、ハズリツド、ジャロルド、カウツキイ、マルクス、サドラア、シイニョア、シスモンディ、スペンサア、ウエイランド、バジヨツト、バステイア、ペーベル、ブレンタノ、ブリジズ、キヤナン、デュウリンク、エンサア、エヴァレット、ジヨオジ、ゴドウィン、グレイアム、グレイ、グレグ、リスト、ロイド、マルロ、ニツチ、オツベンハイマア、パットウツン、ブルドーン、スクロウプ、ソオントン、トウキス等）を取扱ふ。前出「經濟學說研究」と密接に關聯し、第一章は同書第一、二章と、第四章は同書第三、四章と、第二、五章は同書第五章と對照さるべきものである。「マルサスの人口理論の發展には三期を劃し得る。地代の理論、資本の理論、金融資本の理論が、その各時期を現は

す歴史的性質である。……又マルサスの否定的批判は、彼を單に否定する迄と、これに代つて積極的に新理論を確立せる時期との、二期に分ち得る。」そして今後期待されるのは、「十九世紀の終り以後に行はれたる、マルサス人口理論の第三期への肯定的批判の發展と、又同時期に行はれたる、否定的批判の第二期をなす批判の積極的完成」の研究である。著者には、さきに堀經夫博士との共同で、ボナーの名著「マルサスと彼の業績」の翻譯がある。著者の前著「經濟學說研究」をひもどく讀者は、あはせてマルサス研究の一權威南亮三郎教授によるその紹介批評（國民經濟雜誌五四卷三號）をかへりみるべきである。

* 向坂逸郎 地代論研究（昭八・二、改造社、菊判三三〇頁、紙背） 冒章で、日本における最近の地代論々争史が述べられてゐるのは、なにより便利で、讀者を問題にさそひこむにもいい。著者はこの論争史上の主要人物の一人である。その主要人物が「全論争の順序、各人の主張、問題等々を出来るだけ要約して、この論争の概観を興へやう」といふのが、第一章序論である。附録の文獻は

最近の地代論々争に關する文獻とマルクス地代論に關する一般文獻の二門にわたる。後者は邦文二十三種、歐文三十九種。前者は、土方成美・河上肇・二本保幾・高田保馬・猪俣津南雄・三木清・橋田民藏・向坂逸郎・野呂榮太郎・河本勝男・林要・加地雄介・小泉信三・酒井市太郎・橋田三郎・入江猪太郎等十六氏の文獻四十三種。本書の第二章、マルクスの地代理論は、さきに昭和五年十二月號「改造」に發表、高田保馬博士の「マルクス價值論の價值論」（『經濟論叢』第三十卷第一號、昭五・一）中のマルクス對差地代論批判に對して答へるのを機會に向坂氏自身の解釋を示したもの。第三章地代理論の展開のために、さきに昭和六年五月號「改造」に發表、高田博士の「マルクスの地代論と價值論」（『改造』昭六・四）にたいしての答。第四章地代の「戰鬭的解消」―河上博士の地代論―は、さきに昭和六年十月號「中央公論」に發表、河上博士の「地代論に關する諸氏の論争」（『中央公論』昭六・九）にたいする駁論。第五章九官鳥は、歌ふ―加地雄介氏は「如何なる種類の理論家か」―は、さきに昭和七年一月號「批判」に發表、加地氏の「地代論に

於ける論争の諸家は如何なる種類の理論家か(『批判』昭六・一二)にたいする答。第六章河上博士の地代論——その自己清算の始り——はさきに昭和七年一月、三月號「勞農」に發表、河上博士の「地代論に關する共同戰線黨の暴落」(『改造』昭六・一二)にたいする反駁。第七章「獨占」的地代理論は、さきに昭和七年二月號「經濟往來」に發表、林要教授の「修飾せられた地代論——河上博士に答へる——」(『經濟往來』昭六・一二)の中、向坂氏の所論に觸れた部分への答。第八章林要先生の歸明をきく——地代理論について——(『批判』昭七・五)は、林教授の「向坂氏の『社會的又は自然的』(『日』)地代論」(『批判』昭七・三)に對するもの。さて最後の第九章マルクスの價值論と地代論——猪俣津南雄氏の地代理論について——といふのは、表題からすると、附録の文獻にも見あたらないものだが、實は第三章にかゝつてある論文の一部を切りはなして獨立せしめたものらしい。斷りがないので、讀者をまごつかせる。以上によつて明かなとほり、本書は、著者が例外なしに論争の目的で執筆した雜誌論文を、そのまま一卷にまとめたもので、

論争の相手としてえらまれてゐるのは、高田保馬・河上肇・加地雄介・林要の四家である。おのづと著者の政治的立場もうかがはれるであらう。だが、著者はいふ、「不幸にして、吾國のマルクシスト陣營内における政治的戰線の分裂は、マルクシスト間に於ける理論的研究の自己批判を他の形で、行ふことを妨げてゐる。これがために、時として『同一陣營内の亂闘』といふ外觀が目立つて現はれる。しかし、これも止むを得ざるマルクシスト陣營の自己批判であつて、このことを通じて、マルクシズムの正しい理論的展開が可能である。そして結局正しい理論が生れて来る。」(五四・五五頁)となほ、見がせないものに、第一の文獻の「附」として、「わが國小作料の特質の問題」がある。この問題に關する論争は、直接にはゆる地代論争と結びつけられてはゐなかつたが、地代論争のあひだに戰はされてゐたといふのである。「この二つの論争題目は、相互に深く結びついてゐるものである。また地代論争は、結局は、小作料の分析にまで發展すべきものである」云々と著者はいひそへてゐる。だが、著者自身はそ

の戦ひにふみ込んでゐない。

* 高田保馬『經濟原論』(昭八・四、日本評論社、菊判はしがき及目次六頁、本文三四頁、昭和八年) 前年完成した大著「經濟學新講」に、ひきつづいてあらはれたもの。さきの「經濟學」(昭三、日本評論社)とそれとの中間をゆく。はじめ著者は「新講」の抜き書のつもりで筆をとつたが、筆を運ぶにつれて不満の点を盡く書き改め、結局新たな著作となつたのであるといふことが、「はしがき」で述べられてゐる。「大体から云へば『經濟學新講』終卷に於ける立場を全体に互つて貫き通した形になつてゐる。修訂の最も重なる部分は、價值理論に於ける勢力説の立て方を改めたる點、利子理論に於て勢力説を一層はつきりと貫かうとした點、絶對地代に關する見解を改めたる點、利子に關する諸學說の吟味をつけ加へたる點、歸屬説の價值を以前よりも強く認めた點、費用に關する考察をいくらか精密になした點などである。」なほ、さきの「新講」について著者に「貴重な教示」を與へたる學者として、小泉信三、中山伊知郎兩教授にたいする謝意が表されてゐる。つきに目次を示す。

第一篇理論經濟學第一章經濟及び經濟學第二章經濟理論に於ける根本概念第三章理論經濟學の問題第二章生產の理論第一章生產の概念第二章勞働第三章生產手段第四章企業第五章生產費第三篇交換理論第一章交換と市場第二章需要の分析第三章供給の分析第四章價格の構成第五章獨占價格及多占價格第六章結合需要と結合供給第七章生產財の價格第八章一般均衡と生產財の價格第九章貨幣の本質第十章貨幣の價值第十一章貨幣の純資本化第四篇分配の理論第一章分配の原理第二章勞銀の理論第三章地代の理論第四章利子の理論第五章企業利潤の理論第六章其他の所得第七章所得の分布第五篇全體としての經濟第一章靜態の理論第二章經濟動態の概觀第三章前進變動第四章景景氣變動の概念第五章景氣變動の機構第六章景氣變動の原因第七章景氣變動と前進運動との交錯——いま、分配の理論においては、二つの根本原理の對立が説かれる。およそ一般均衡論においては、各種の所得が經濟的諸數量の相互作用の間に決定するのであるが、この均衡論は、さらに「一步立入つての考察」を斥けるものであつてはなら

ない。かかる相互作用は認めるとしても、その錯綜せる因果關係の中に、各種の所得の大きさを「直接に決定するもの」が何であるかを明かにすることができ。この問題の考察において二つの原理の對立が認められるのである。第一は限界法則または限界原理 (Grenzprinzip, Grundsatz, marginal principle) であり、いはゆる差益原則はそれの一面面に外ならず、第二は勢力原理 (Machtprinzip, power principle) である。限界原理は一つの經濟的數量の大きさが他の經濟的數量の限界的な大きさによつて定まるといふ一般關係を説明する。價格または代價 (報酬) が限界收益または限界效用によつて定まるときは、他方の諸單位に種々なる餘剩 (消費者餘剩、節約者餘剩、生産者餘剩) が伴ふといふ思想および、所得を説明する學理としての歸屬説、限界生産力説はこれに屬する。兩者に共通の特徴は、「生産財の一定の組合せから、ある生産財の最後の一單位を加除することによつて、増減するところの生産物價格を、其生産的貢獻又は限界生産力と見、それが此生産財の價值又は價格を決定するものと見る点にある。兩者

の差異は「前者がさきだつ所の生産財價格を前提することなく、後者が資本及び生産の複雑なる組織を前提とする點に存する。」著者の見解によれば、限界生産力説には二つの型がある。第一は、限界生産力 (單純限界生産力) によつて生産財の價格を説明しようとするもの、第二は、殘餘限界生産力 (純生産力) によつて、さうしようとするもの。一定の生産財の結合から或る生産財の限界單位を引きぬくときに減少する生産物價格が「單純限界生産力」、また、一定の生産財の結合から或る生産財の限界單位を去ると共に、残りの結合を最も有利ならしめるやう他の生産財の小部分をも取り去り、その結果減少すべき生産物價格から、同時に取り去つた他の生産財の價格を引き去つた殘餘が、その生産財の殘餘限界生産力である。「單純限界生産力は多くの場合、生産財の價格よりも大なるを常とする。この差額は、生産財の結合の性質を一變せしむるほどに、生産財をぬきとるからである、といふ主張もあるが、事實はさうでない。……けれども企業者が、此單純限界生産力に従つて生産財を評價する、と云ふ必然性

はどこにもない。企業の性質上、彼等は殘餘限界生産力を考ふるものと思はれる。蓋し此考方のみが、企業計畫を合理的ならしむるからである。」(一七四頁) 靜態において、殘餘限界生産力が生産財價格を決定するといふ主張は、效用經濟を前提とすれば肯定されるが、勢力經濟の支配を前提とすれば、勢力が根本において生産財の價格を決定する。「效用經濟に於いても、勢力經濟に於ても、靜態に於ては費用法則が支配し、費用と生産物價格は相等しきものと認められる。而も同時に、そこには限界生産力と生産財價格の一致があると考へられてゐる。此二つのことがら、如何にして調和し得るものであるか。それは云ふまでもなく、靜態に於ては限界生産力と平均生産力との相等しきことを前提とするからである。……動態に於ては、限界生産力と平均生産力との相一致することはない。然らば此場合、限界生産力説の支配範圍を擴張しようとする立場からは、動態に於ては限界生産力に於て生産財價格が定まると主張せらるゝであらう。けれども、限界生産力と生産財價格との一致を見ることは、たゞ靜

態に於けることである。動態に於ては此間の聯絡がたち切られる。利潤の増加してゆく場合に於ては、生産財價格が限界生産力よりも著しく下位にあるであらう。利潤の減少乃至消滅する場合には、それよりも上位にあることも稀ではない。而して限界生産力よりもどれだけ高き、又低きところに、生産財價格が定められてあるかと云ふことは、根本に於て惛力による、と説明せらるべきである。而も此惛力の中心的なるものは勢力關係である。動態に於ける生産價格は限界原理によつて説明せらるべく見えて其實、勢力原理によつて説明せらるべきである。(一七六・一七七頁) つまり、これが社會的分配を支配する根本原理であり、この原理によつて、各種の所得・勞銀・地代・利子・企業利潤等)の決定が説明されなければならぬ。利子理論において博士はいふ、利子の源泉は資本利潤以外に考へられないのであるから、利子源泉の問題の本質は資本利潤はいかにして成立するかといふことである。費用法則にしたがへば、生産物の價格は(1)勞銀(2)地代および(3)資本財補償部分の價格の合和に等しい。しかるに第

三の資本財は、究極において、地代と勞銀とに分析されるから、つまるところ生産物の價格は地代と勞銀の二つから成るといへる。しかば費用以上の餘剩たる資本利潤が成立するのは、費用法則の十分に支配せざるところ、すなはち動態にかぎられる。靜態は競争が行きつくところまで完全におこなはれてゐるところと解されてゐるから、その競争の到達点への進行を喰ひとめるものが何であるかが問題である。著者はその根本的なものを求めて、「一は需要に對する供給の適應過程に於ける摩擦、二は生産財價格の安定性」であるといふ。動態の理解は新しき結合を中心とする。ここに新しき結合とは「經濟的可能の新しき結合」である。一企業における生産技術の改善を意味し、また、需要の増大にたいする供給の新しき適應を意味する。企業は、より新しき結合を次ぎ次ぎに求めて、一つの結合に停止してゐない。これ一の企業の利潤が永續性をもつ理由である。社會全体についてみると、利潤の永續性が一層顯著なのは、一の企業が利潤を失ひまたは損失を蒙りつつあるときに、新しき企業が新しき結合を

企てるからだ。利子が資本利潤から吸ひ上げられるためには、企業と資本家との對立がなければならぬ。企業は資本用役の需要者である。資本用役の供給には限度があり、ここに需給關係を生じ、利子が成立する。利子が動態においてのみ成立するといふのは、利子の源泉たる資本利潤が動態にのみ成立するとする理論からの直ぐの歸結である。資本用役の供給量は限定されてゐる。その供給は(1)蓄積(貯蓄)および(2)信用創造によつて可能なのであるが、前者が基本的である。各所得者は、所得の現在および將來への配分(著書には「分配」といつてゐるけれども、この解題の最大多數の讀者の、理解の便利のために、しばらく用語を改めることゝゆるされたり)において、最大満足をめざす。(「極大の法則」二三四頁)要するに蓄積には限度がある。信用創造は主として銀行によつて行はれ、創造された信用は、蓄積された資本と共に市場にあらはれるが、それも支拂準備との比率の關係から一定の限度がある。さて、競争なるものは現實の經濟では無際限に進行しうるものではない。競争の進行にたいする「輪止め」は永續的である。とい

ふのは、「生産財價格の適應は十分でない。競争が十分であるならば、供給價格を低廉ならしむる競争が行はれると共に、生産財價格を釣上げようとする競争が行はるゝはずである。然るに、生産力に應じて生産財價格は上昇し得ぬ、それは労働者の社會的地位に、應じたるところに、推しつけられてゐる。勞銀の安定性はこれを意味する。而して此安定は極めて永續的なものである。現實の經濟を、かの純粹なる靜態から遠いところに置くものは、生産財價格の、いゝ性質にある。」(圈点は解題者)(二三六頁)かくて限界的地位にある企業とても利子だけの資本利潤はあげうる地位にある。この利子だけの利潤なるものは企業の優先的地位にもとづくといふよりも、すべての企業にたいして一般にあたへられる性質のもので、利子の源泉としての資本利潤は勞銀の安定性にもとづくのである。以上、著者の思想の最も特色ある部分の一端を紹介するとどめる。宮田喜代藏教授が、この書物の全体としての感觸を指摘して、「本書には博士の多年研究の結果到達した自己の學說を表面に出さんとする強い力を感得する。」

といひ、そして「その事は、一つには、從來の諸の學說に對して *positive* な立場が顯著に目撃されることの中に、もう一つには、自己の學說を *positive* せんとする態度のうちに感ずることが出来る。したがつてこの意味では、本書は經濟理論の全くの初歩の人にとつてよりも、むしろ高い程度の研究の人にとつて更に多くの價値をもつてゐると言へよう。」(商業經濟論叢第十一卷別冊)といつてゐるのは當つてゐる。

* 中山伊知郎 **純粹經濟學** (昭八・一二、岩波書店、岩波全書 序及目次七頁、本文二五五頁)。

著者は、この書物の目的が主として「經濟現象を理解する手段としての理論」をのべることにあると序文の第一行で斷つてゐる。現象理解の「手段としての理論」といふことをきつぱり言つたのは、何でもないこととやうだが、科學の性質と方法についての意識の高度の明確性を示すものであるまいか。これまでの一部の經濟理論家は理解の「道具」または「手段」として理論や原理を考へずに、それ自体を知ることが窮極目的であるかのやうに、理論を取り扱つて來てゐるし、さうあるべきだとは思はないに

しろ、書いたものの上では、すくなくともさう思つてゐると認められても仕方のないやうな論述の仕方をして來てゐるのである。かゝる意味の「理論」は、いはゆる經濟理論の全部にあたるものでないが、すくなくとも基本的な部分であり、その基本的な部分が「均衡理論のあらゆる形態」から成りたつものだといふのが著者の見解である。この書物は、その均衡論すなはち經濟現象を理解する「手段」を述べたものだ。均衡論の成立は數理派の貢獻に依るけれども、その根本思想の叙述だけなら數學的表現(數式の導入)を必要としないといはれるが、この書物は一面においてそれを實證した著作だともいへる。「序」によれば、著者が一九二七年の秋ドイツ・ボン大學のシュムペーター教授の許でめぐりあつて以來、東畑精一教授の友情に負ふところが一番大きい。「爾來吾々(東畑・中山兩教授)の目標は、明に、如何に、シュムペーターからの一步を踏み出すか、に定められたと云つてよい。」(圈点は解題者)とあるから、啓蒙的目的をこえたこの著作の學問的意義はさういふ角度から、つまり、いかに中山教授が

シュムペーターから「一步を踏み出」したかといふ角度から見るのが、正しい見方であらう。「經濟均衡理論が所謂靜態の理論にあたるものとせられ、動態の理論は完全に均衡理論の外にあるものとせられる見解」(シュムペーター)にたいし、均衡理論が動態の理論にも適用さるべきものとする事において、著者は一步をすゝめたのである。靜態論は均衡論が直接の應用をもつ領域であり、動態論は間接の應用から成りたつ部分であり、したがつて經濟學は動態・靜學ともに均衡論をもつて貫かれたものでなければならぬといふのが著者の根本思想である。レオン・ワラス以來の經濟均衡學說史は、この意味で、中山教授によつて一つの飛躍的發展を遂げようとしてゐるかにおもはる。著者は經濟的發展の意味を「不斷に行はれつゝある」「資本變動」の結果と解釋することによつて、經濟的循環の進行そのものをして不斷の經濟的發展を豫想せしめ、「かゝる場合こそ現實に極めて近き發展の状態であり、こゝにこそ我々は多くの最も我々の經驗に近き事實に接觸する。」(二二頁)といふ。この書物の紹介

介者として最もすぐれた理解を示した杉本榮一教授の批評によれば「發展・生長・循環の諸現象が相關聯して取扱はるべき可能性が開かれるのみではない、これらの諸現象を統一的に取扱ふべき理論的武器の構造が暗示される。それは動的均衡の概念である。現に發展の過程にある現實の經濟にあつては適應過程の完了しないうちには現に新たな條件變化が行はれるから、均衡點は時々刻々に推移し、從つて同一點に存在する諸經濟量の均衡(靜的均衡)の概念を以てしては、これを理解するに由がない。」「動的均衡なるものは存在せず」と固執するシュムペーター經濟學に反して、中山經濟學が「動ける均衡」(二五四頁)の概念を暗示してゐるのは理論上極めて興味あるものと云ふべきである。(「橋新聞昭九・二・二」)杉本教授の紹介は、このあたらしい著作の性質および意義を數理經濟學の史的展望のうへに決定してゐるのみではない。紹介者自身の學問上の志向によつて拍車をかけられた解釋と希望とがある。だが「動的均衡」の概念と希望との方向へ、今後の著者がいかに乗りだすか否かは、われわれの窺知しうることがらではない。いづ

れにせよ、中山・杉本兩教授が同一學内にあつて研學の上に著しく共通の領域をうちひらきつつあるのは、はなはだ興味ふかいことであり、この國の經濟學界に求めて得やすからざることだとおもふ。この著作の主要概念たる「均衡」の本來的な意味が何等の説明なしにもちゐられてゐるのは、初心の經濟學研究者を戸までひせしめるのみではない。專攻者の思索を刺戟するうへにも不足を感ぜしめないとはいひがたい。いふまでもなく「均衡」はもともと力學上の概念であるから、經濟學における均衡概念の適用が、いかなる限界ないし程度において（またいかなる意味において）力學上の均衡概念と照應するやいなやを吟味決定しておくほど肝要なことはないとおもはれる。このことは、紙幅にひどく制限をうけてゐる本書にたいして、一見のぞむべからざることのやうにもおもはれるが、あらゆる問題がそれひとつとむすびつけられてゐるやうな概念については、いかにくはしい解説があつたとて過ぎるといふことはあるまい。いはんや『動ける均衡』『動的均衡』といふがごとく、一見して自己矛盾とも見

える概念の説明においては、如上の要求はいよいよ熾烈とならざるをえないので、ある。本書が純粹經濟學の今日までは到達した諸成果を十分に綜合繼承しつゝその必然的發展の線に沿つて明日の純粹經濟學樹立への決定的一步を踏みだした、といふ意味に於て斯學の歴史にうへに一地位を要求し得るであらう」といふ杉本教授の評價は、主として本書の獨創的方面にかゝるものであり、「本書の刊行を以て一九三三年度に於ける最大の收穫」とたゞへるのも、その理由によるものであるが、他方において、この書物が世界における經濟學の最も新しい傾向の一面を簡潔な姿において、ひろくこの國の經濟學の讀者に傳へつつある啓蒙的役わりの大いさも輕視されてはならない。これまで經濟原理のまとまつた著作といへば、ほとんど例外なく膨大なものになりがちで、讀者は一卷を讀了しても到底まとまつた全体的な理解に到達することができないのを例とするが、この著作において、われわれはかかる一般傾向にたいする鋭いプロテストを見いださざるをえない。それが、著者の意圖と無關係のことであるにせよ、

結果としては事實である。最後に、著者一個の見解としてではなく經濟學上の定説として述べられた箇所について問題のあるところを一つ、摘出してみる。——「所得の單位について成立するところの限界利用均等の法則はこれを財の單位に引直して表現するときには次の如くにならねばならぬ。曰く、個人にとつての最大満足狀態はその利得によつて獲得せられる一財の價格が大なれば大なる程その限界利用は大でなければならぬのである。限界利用均等の法則は屢々かゝる後の形式を以て表現せられる。けれども前の形式と後の形式とは表現の相違を有するのみであつて實質的には全然同一である。」（四〇頁）だが、後の形式をもつて表現することは、解題者の意見によれば、不可能である。いふまでもなく限界利用は限界單位の利用であり、およそ單位なるものは共通の費用單位でなければならぬ。この設定なくして限界利用の均等を説くは意味をなさず、各財獨自の諸單位について、それぞれの利用の大小または均等を云々するは、もちろん不可能ではないが、意味の乏しいことであらう。著者は限界利

用均等法則をもつて一應「均衡の原理」であるとなし(四一頁)、その「一般化として」經濟の循環の全領域を支配する」すがたを後段で示すべく約束してゐるぐらゐなので、この法則の最初の説明における以上の疑点にふれておくことは無意味であるまい。だが、いはゆる「均衡の原理」としての限界利用均等法則の適用と擴充とは、本書全体を通じて、一般讀者の眼にうつるほどに浮きあがつたすがたを呈してゐるのではない。全卷を四章にわけ、數學註(二四二—二五五頁)を附す。第一章總論(1)純粹經濟學一般(2)純粹經濟學の分類(3)經濟現象の理解について第二章經濟循環の理論(1)經濟の循環とその内容(2)需要の分析(3)限界利用學說(4)生産費の分析—供給の分析(5)需要と供給との均衡(6)均衡狀態と經濟の循環(7)獨占について(8)生産財の價格としての利得の成立(9)貨銀及び地代(10)經濟の循環に於ける資本又は資本財の地位(11)經濟の循環と貨幣第三章興件、變動と經濟の適應(1)經濟均衡理論の性質(2)興件、變動とその意味(3)(4)(5)人口・欲望・生産方法の變動と經濟の適應第四章經濟發展の理論(1)資本の變動と經濟の發

展(2)投資・貨幣資本及び信用(3)信用の性質(4)利潤について(5)利子について(6)經濟の發展と循環との交渉(7)既に發展の過程にある經濟の諸現象——利子・貯蓄並に資本化(8)景氣變動及び經濟恐慌(9)結語。ここに發展論の樞軸としての資本の變動が人口・欲望・生産方法等の變動から區別されるのは、そのみが純經濟的の現象であることとめられてゐるからである。「發展」とは資本の變動によつてもたらされる經濟の變動現象であると理解されるのはこのためである。したがつて企業者は經濟の發展現象における中心に位し、かれの利潤追求は新投資の根本動機となり、資本變動の原因、したがつて均衡破壊の原因である。だが、かかる意味の、つまり經濟發展の動因としての企業者なるものは、あらゆる企業者ではなく「獨創的に生産方法の革新を實行し得る人格」でなければならぬ。かく企業者をもつて、たんに經濟循環の樞機とみるのみでなく、經濟的創造の擔ひ手、つまり動態現象の擔ひ手とする根本見解は、ひろく知られたシユムペーターの思想である。著者がこの國におけるかかる思想の最初の繼承者たるす

がたを呈してゐることも注意されていい。

*土方成美 國民所得の構成(昭八・六、日本評論社、獨判はしがき及目次一三頁、本文三九一頁、他に統計表十數葉、附註)

著者が國民所得の推計を志した動機は(1)租稅負擔の國民所得に對する關係を究めること、(2)産業別所得または階級別(資本家・勞務者)所得の變動が景氣に及ぼす影響並びに逆に景氣變動によつて生ずる各種所得の變動を究めること、(種別別所得の變動は景氣變動の結果であると同時に又その原因でもある)にあるといふ。そこで國民所得總額の推計にとどまらず、産業別所得および種類別所得の累年の變動を見ようとするのである。この至難なる事業は昭和五年の春から着手され、資料の蒐集、計算、圖表作製には、福田省三、井上謙二兩氏が著者を援けたとある。全卷十三章より成る。第一章總論以下農林業水産業礦業工業交通運輸業商業の所得、政府より得る個人の所得(官公吏の所得・公債の利子・恩給年金・郵便貯金の利子)・自由業の所得、地代及賃貸料所得、其他の諸所得(海外在留本邦人の送金及持歸金・大藏省預金部手持有價證券よりの利子收入・貿易外收

支勘定による支拂額等)、および官公所得を章別にする。この書物の目的にそふ所得概念は「年々新に各産業各職業によつて獲得せられる貨幣價值であつて、消費及び貯蓄乃至投資に使用せられるもの」と規定される。主として現金収入であるが、自家消費にあてられる巨額の農産物だけは農業所得中に算入される。資本、財産の増減價および減價償却は、一二の事情によつて、考慮されない。企業の純損金については、それを控除したるものと、せざるものとの兩結果を掲げる。國民所得の算出方法については、種類別の所得構成を知る目的からすると所得稅統計を利用する主觀的方法は排棄しなければならぬ。また、生産物統計を利用する客觀的方法是農林業、水産業にとどめ、それ以外の各産業については、企業における總收入を勞銀、利子、利潤等に分析することによつて各産業の純收入を計算する方法が採用される。「但し工業に就ては、昭和四年並に五年につき生産統計による方法を採用して、企業總收入を分析する方法によつて得たる結果とを比較して出来る限り過誤なきを期した。又商業について

も、卸賣小賣の差額より別に其所得の推計を試みて兩結果を比較對照した。期間については、大正八年以降昭和五年にいたる期間について推計、明治三十三年ないし大正七年については大正八年以降の研究を基礎としてその上に推計する。いま、こゝろみに貯蓄ないし投資所得對消費所得の關係についての調査方法を見るに、「貯蓄乃至投資所得を推算するに如何なる方法によるべきであるか、抽象的に考へれば、個人の貯蓄、預金等の信用授與關係による債權額の増加として觀察することも出来れば、企業に於ける様式拂込金等の形をもつて増加する投資額をとることも一つの方法である。又貯蓄と投資とは同一ではない。個人より見れば銀行への預金は一種の投資と見ることが出来るかも知れないが、國民經濟全体より見れば、預金は貸出されて始めて投資となる。故に貯蓄と投資とは一應別けて觀察する必要がある。しかし、企業に於て貯蓄と同時に投資せられる部分もあり、此二つを分つて觀察する事の不可能なる部分もある事は注意すべき事である。殊に資料の缺乏によつて到底望むまゝの數字を得る事は出

来ない。」先づ第一の方法として、信用授與關係によつて貯蓄額を推算し、第二の方法として、投資關係による負債額から投資額を推算し、兩結果を對照するのである。その結果について見ると、各年については二方法による推算が相當に乖離してゐる。しかし平均するといづれの場合も大体年二十億圓内外の貯蓄乃至投資となり、國民所得總額にたいして約一割五分にあたるので、かかる推算の結果が全く出たらめでないことを示す一つの論證にもなるかといつてゐる。著者はいふ、「特に興味のあるのは、大正八年、九年、十年、十一年、十二年、十四年に於て、殊に大正八年に於て投資額が著しく貯蓄額を超え、大正十三年、昭和元年、二年、三年と投資額は、貯蓄額以下になつてゐる。即ち好景氣に於ては其年の貯蓄額以上が投資せられ、不景氣に於ては、貯蓄額が全部投資せられない事をあらはしてゐる。かくして一方消費所得を考慮に入れるとき、好景氣に於ける過大投資が相對的購買力の減少と相俟つて恐慌を惹起する契機となる事を看取することが出来るのである。大正八年には國民所得の三割六分ま

でもが投資せられ、もつて大正九年恐慌來の因をなしてゐる跡は歴然たるものがある。大正八年は利潤所得が勤勞所得に對して割合上、極めて大であつた年である。これをもつて好景氣が恐慌に到るのを防止するためには、利潤所得を課税、利潤分配その他の方法によつて、比較的縮小せしめるのが一策である事を知る事が出来る。」(五六頁)と。

* 汐見三郎、毛里英於菟、武田長太郎、益田熊雄共著 **國民所得の分配** (昭八・二、有斐閣、菊判、序言及目次七頁、本文二二二頁、附表五四頁、P. 400) 財政金融研究會紀要第一卷である。

同會の同人は「過去又は現在に於て京都帝國大學の大學院に學び、現に財政學又は金融論の研究を續けてゐるもの」(附表は明治二十年から昭和六年にいたる四十五年間の所得分配統計。「單に租税徴收の參考資料としてのみ利用せられた統計數字に加工を施し財政政策の基本問題を解決する資料に應用した所に著書の苦心が存してゐる。」全体を總論と結論の二章のほか四章にわかれ、第二章は國民所得分配の研究方法。その一、一聯の統計系列による方法(所得税

統計による度數分布法・社會的經濟的日盛方法による分布表・ロードベルトスの方法・マナーの方法・中位數、四分位數、十分位數の方法)その二、單一の分散度による方法(所得範圍による方法・最低生活標準による方法、一定所得における人數と所得との比較による方法・ボウラーの方法・ホルムスの三段測定法・半對數關係表法・ローレンツ曲線・變異係數・相對的平均差・相對的平均偏差・パレートの定數・現實的相對的平均差・三の定數)第三章および第四章は所得稅法による國民所得の分配の研究および測定。第五章は戶數割による國民所得の分配の測定。これらの執筆分擔は、第一章汐見博士、第二章益田大阪商大講師、第三章汐見博士、第四章武田學士と汐見博士、第五章毛里下京稅務署長、第六章汐見博士である。もともこの著作は財政金融の部門に關するものであるが、國富および國民所得の概念と計算に關しては、原論學者の根本見解をかへりみないわけにゆかないものであり、さうした顧慮においてこの著作は缺けるところのないものであるから、理論研究家の注意をもうながすために、ここに紹介しておく

のである。土方成美博士の「國民所得の構成」(前出)とともに、この方面の實證的研究が諸學者の協力によつてなしとけられた目ざましい實例であつて、いづれも國民所得に關する好著が、この年度にそろつて公開されたことは興味がある。

* 福田德三博士追憶論文集刊行委員會(代表者 中山伊知郎)編輯 **經濟學研究** (昭八・四、森山書店、菊判口綴故博士肖像一葉序一〇頁、邦文六二二頁、歐文二五五頁、P. 300)「故法學博士福田德三先生と交り深かりし内外の友人ならびに親しく先生の教を受けし門下有志の執筆にかゝる先生追憶の論文二十八篇を集めたもの」(坂西由藏博士序)全卷を三部にわけ、第一部經濟學・經濟學史及び經濟政策、第二部東洋及西洋經濟史、第三部海外よりの寄稿とする。第三部の寄稿家は、エム・ジェー・ボン、シエール・ジード、ロバート・リーフマン、ワルター・ロツツ、ロバート・ゾトルブラントの五家。第二部はこの解題の範圍外に關するので、ここには第一部の諸論文の題名のみを列舉する。——租稅原則論の諸問題(井藤半輔)「國富論と」道德情操論」(小泉信三)生活經濟價值序論(宮田喜

代藏) 經濟理論と經濟社會學(中山伊知郎) 經濟配分の問題—On the two principles of “The division and distribution of labour” (Adam Smith) —(大熊信行) 貨幣中心論」に對する修正の試み(杉村廣藏) 著稱理論の書き改め(高田保馬) 心理的經濟價值説の歴史的研究の一節——チュルゴーの Valeurs et monnaies の想源に就いて——(手塚壽郎) トムマーズ・ダクキーンに於ける財の概念について(上田辰之助) 貨幣の價值の特性(梅田政勝) ヴイルブラントの實踐經濟學(山田雄三) の十一篇である。その後、第一、二部が分冊となつて發賣されてゐる。小泉信三「國富論」と「道德情操論」は、刊行のあひだに約十七年の歲月をへだててゐる。アダム・スミスの經濟學および倫理學の二大著作が、いかなる理論的關係にあるかを決定的に説明したものである。この問題については日本においてすらも、古く藤井健次郎博士のごときが所見を述べた例があり、解釋が區々にわかれてゐたのであるが、筆者はこの問題に關する歐洲諸學者の考察および考證の跡を對照し、それらを綜合しつつ、直接「道德情操論」の諸要所を吟味すること

によつて、一定の解釋にまで讀者をみちびいてゐる。「國富論」と「道德情操論」とが互に相容れない原理によつてさへられてゐるとする通俗の見解は、後者の原理たる「同情」を自愛心の反對物としての愛他心の意味に解することにもとづく。しかるにもともとスミスは自利心(自愛心)をもつて一概に不徳とみとめず、すでに「道德情操論」において自愛心がいかなる場合にも徳行の動機たりえないとするハチソンの立場に反對してゐる。スミスは「明に利己心から發生する徳のあることを認めてゐる。思慮、油斷なきこと、用心、節制、不變、堅固の徳は其である。」「解題者註。諸徳の原語名を省く」其は等級の低い徳であるが、併し猶ほ徳たるを失はぬものであつて、而かも仁愛心に由ては、説明せられないものである。利己心から發する行爲も、スミスに従へば、或適當の程度に於ては徳行たることを得るのである。」「スミスの倫理學における同情の原理は、道德的是認又は否認の原理として打ち立てられたもので直ちに徳行の唯一の源泉として説かれたのではない。」「筆者はスミスの兩著作における二原理の關係

といふ問題のみにとどまらず、かれの倫理學そのものの性質を全体として説明するためにも多くのペーヂをつひやしてゐる。經濟學の讀者は「國富論」について改めて多くを學ぶを要しない。この一論はスミス倫理學説の紹介としても手引としても研究家の注意に値するであらう。——宮田喜代藏 **生活經濟價值序論**は、筆者自身の經濟學上の根本概念(將來おそらく筆者の經濟學体系の基礎たるべきもの)を、純粹にみかきあげた理論として展開したものの、二節から成りたつ。第一、經濟生活の經濟價值(1) 經濟生活の全体的評價(2) 經濟生活の綜合的評價(3) 經濟行爲の經濟價值、第二、經濟財の經濟價值(1) 自足經濟の段階(2) 直接交換の段階(3) 貨幣經濟の段階(4) 計畫經濟の段階、ほかに結語と後記がある。まづ注意すべきは「經濟價值」といふ用語の意味である。「われわれの經濟生活を最も根本において指導する本來の經濟價值は、形成應としての經濟生活の全體的な、そして綜合的な價值判斷の結果である。これが生活經濟學の到達した經濟價值論の成果であつて、本編はこれらの點を明かにせんことを目的とし

てゐる（「個点は解題者」）筆者が「生活經濟學」と稱する經濟學上の一つの立場を設定し、自足完結的な内容を規定し、すでに客觀的に完成された一体系が存在するもののごとくに思ひさだめたうへで、その体系を説明紹述するといふやうな行論の仕方を執つてゐることは、右の引用文をとほしてもうかがはれるであらう。かくのごとく自説の特徵的な諸点を讀者の判斷にゆだねず、一々説明指摘しつつ議論をやる方法もまた一つの方法にはちがひない。筆者における經濟價值の問題が、スミス、リカード以來經濟學に説くところの價值形成の問題であるよりも、まづ價值判斷の問題であるかのごとく見ることが注意をひく。これ筆者が一方には主觀學派なかんづく、ローバート・リーフマンの主觀主義を繼承し、他方には左右田博士以來のいはゆる「經濟哲學」における目的論的な經濟價值の概念に交渉せんとする結果でもあらう。宮田教授の經濟學は「生活」の全体をになふ經濟主体としての人間を出發點とも中心とするもので、經濟生活は一つの價值判斷の生活であり「給付に結びついた費用價值と、反對給付に

結びついた利用價值とを、相關的に判斷する綜合的評價」の世界である。經濟生活の目的はかゝる綜合的評價の成果としての「最大の生活餘利」の實現にある。これをもつて「本來の經濟價值の判斷」とよぶのはおよそ「經濟」に本質的なものとの意味だ。歴史的形態を異にする經濟の各段階において、かゝる本來的なるものが見うしなはれるものでないことは、經濟行為および經濟財の兩側面にかかはらしめて説明される。この生活經濟價值の体系なるものは、筆者の見解によれば、經濟學にいはゆる價值論の全内容を形成する。いつたい、價值論といふものは理論經濟學において二つの役割をつくらすべきである。經濟本質論の領域では經濟的認識の嚮導理念を明かにし、また價格論の領域では價格生成の説明原理たる役割をはたす。いま生活經濟價值論こそはその二つの役割を併せて完全に果たすものだといふのである。經濟學がその用語として可及的に實際界の日常用語を踏襲することは傳統的な約束であるが、理論的分析が深きに及ぶにしたがつて、専門的な新造語の必要にせまられるのはやむをえな

い。しかし、ここでは「價值」といふ用語の經濟學上の傳統すらもが放擲されなければならぬといふ徴候の一例（かゝる例は他にもある）を見る。商品の「價值」とはその商品と交換される他の商品の分量であるといふのは、リカード以來うごかざる經濟學上の價值概念である。しかるに、この簡明な概念を、もはや認識されないまでに混亂せしめたものは、近世ドイツの言葉の煩瑣哲學の純然たる狂氣の力であるとは、現代の一理論經濟學者の批評である。「價值」といふ言葉の説明をもつて、經濟學ないし經濟價值論の課題であるかのごとく信じたのは、たしかにドイツ學者の系統であるが、この系統たるや日本において獨特の發展を遂げつつあることも注意さるべきである。「經濟哲學」の名においておこなはれてゐる論議、これである。宮田教授の体系はみづから「經濟哲學」と唱へるものではないが、いちじるしくそれと近似の一面を呈してゐることは争へない。高木友三郎博士のあの「生の經濟哲學」が、まさしく一箇の「經濟哲學」だとすれば、宮田教授の「生活經濟學」の一面にも、一箇の「經濟

哲學」を見いだすこと、すくなくともさうした甲羅を背負つたものと認めることは差支ないであらう。經濟現象のあらゆる理解を一定の經濟理想(理念)にかゝはらしめ、因果論と目的論との綜合体系をたてようとするかゝる志向はアムビシアスでもあり、はなはだ危険でもある。經濟學の正系からの逸脱を意味するからである。問題はこれらの道をとることが認識の方法として便宜であるかに歸するにせよ、もし經濟學上および實際生活上の古い傳統的諸用語例を破壊せず放棄せずして、しかも經濟學的認識そのものを深めることができるならば、それに越したことはあるまい。なぜなら、さうした時にのみ、はじめて科學にたいする個人の學者の貢獻および科學そのものの進歩が、明確に決定されるであらうから。とはいへ、宮田教授の理論を高木博士のそれと並べるとき、行論の精緻周密なることにおいて比較を絶してゐる觀のあるのも事實である。この兩學者が、一面はなほだ酷似した思想の持主であり、この年度に前後してまとまつた論文を發表してゐることは、ここに敢て對照されてしかるべき十分な理由

である。——中山伊知郎經濟理論と經濟社會學は、もともと經濟理論のアウトノミが、何よりも經濟興件(人口の總數および構成、社會組織、生産技術のごとく經濟理論の前提となるもの)に關する知識から區別される点に求めらるべきであつたにかかはらず、再び逆に、この區別を解消しざるやうな方向に經濟學の風潮が向はんとしてゐる事實に當面して提言されたもの。「この趣きは廣義の經濟社會學の中から一の自律的な體系として成立して來た經濟理論が再びその母胎たる經濟社會學との關係を自ら問題とするに相等しい。」これは一つの後退を意味するか、自然的な發展の過程を意味するか、本文はこれに答へようとするといふ。第一、問題なのは「經濟社會學」の意味である。中山教授は「經濟に關係する一切の知識にして、而も嚴密には經濟理論の自足的な體系に屬せざるもの」と定義するが、かかる一科學の想定は經濟理論の自足性を強調する目的にいづるにすぎないので、おそらく社會學者を満足せしめることは決してないであらう。筆者はまづ問題に答へるために必要な順序として、經

濟理論の本質の何たるかを問うて直ちにこれを經濟均衡論なりとし、均衡論發達史の概要を述べる。それは均衡理論純粹化の過程または「清算過程」である。その過程によつて「從來經濟學に於て興味を中心であつたところの若干の諸點がその本來の理論から除去せられたことを認めねばならぬ。即ち經濟理論がその經濟社會學的基礎から獨立することは一應理論にとつて極めて重要なべき具体的事實に關する知識を理論の外に投げ出すことになることを認めざるを得ない。」しかも「經濟理論の純化過程の中に一旦失はれるが如く見える諸の興味ある問題の解決は實はかくの如く經濟社會學より區別せられたる理論の發達に依つてのみ十分に可能とせられるのである。」ともいふ。結局、中山教授の目的とするところは、經濟理論を經濟理論として純化せしめることの正當を主張するにあり、その根據としては、經濟學に當然求めらるべき諸問題の解答が、たゞ經濟社會學と經濟理論との結合によつてのみあたへられ、混淆によつてあたへられるものでないから、といふにあるらしい。われわれが「現實の理解

に接近し得る」ためには、たんなる經濟理論は用をなさず「經濟社會學と相伴ふことに依つてのみ」その目的を達しうるのであり、「變革期にある現代が強く要求するところのもの」は「經濟理論をもその中にふくましめたる膨大なる經濟社會學の全体」であるといふやうな十分勇敢な論旨が最後に近づいてからあらはれてくる。しかも「經濟理論の獨立性」は否定すべらずとの主張が、そのあとにくりかへされるのである。

その「獨立性」とはいかなる意味か。解題者按ずるに、たとへば或種の道具の獨立性にちかきか。鑿は一見して一箇獨立の道具にはちがひない。だが、他方に槌なくんば殆ど無用にちかい。求めるものは鑿ひとつにあらず、槌ひとつにあらず、さて鑿と槌にもあらず。いかにして鑿を槌もて撃つか、といふことこそ經濟學の眞實の課題でなければならぬ。この一論は均衡理論の發達史を説くに行文極めて明快、均衡理論の「獨立性」を説くに論調極めて力づよい。むしろ全体の感觸は「經濟理論」專攻の非難にたいする反駁の氣分あふれ、經濟社會學と經濟理論との交渉、ことに兩者綜合の方

法（そののみが「現實の理解に接近し得る」といふ意味の）にたいする積極的示唆は乏しいやうにおもはれる。——大熊信行「經濟配分の問題」では、さきにマルクス「資本論」の体系における配分學說の所在が、冒章商品分析のロビンソン物語に尋ねあてられたにたいし、アダム・スミス「國富論」の体系における配分學說の所在が、分業論の再吟味によつて、たしかめられてゐる。スミスの分業論が、後段にいたつて、生産各部門への社會的労働の配分をも論じてゐる數個所を原文から摘出したのである。それはビュヒアの批評に添うて、ビュヒアとも別れる。かくて技術（配合）と經濟（配分）との混同がスミス以後經濟學の歴史を一貫してマルクスにいたり、さらに變貌をとけて現代の經濟學に潜んでゐる事情を指摘し、さらに諸學者の計劃經濟論に浸潤してゐることを示唆する。配分學說の研究が價值論はなれて組織論の角度からころみられてゐることが、この一論をこれまでの諸論文からわかつ特徴であるといふこともできる。

——杉村廣藏「貨幣中心論」に對する修正の試み 筆者は經濟を價值秩序または

「統一的な價值づけ行程」であると解し、貨幣をその行程の客體化の標徴であると解する。そのやうな標徴はあらゆる經濟に缺くべからざるものであるから「貨幣なき經濟は考へられぬ」となる。しかし「交換なき經濟は考へられずとはいひ得ない」といふことになつて、左右田説をまづ止揚する。そこで問題は、「交換なき經濟」における貨幣とはいかなるものかといふことになるのだが、筆者はそこまで問題をもつてゆかない。貨幣が交換の媒介であるといふ「古典的定義」は歴史的事實の認識からそれてゐないけれども、貨幣の本質的定義たりえない。評價關係の普通妥當性が經濟の秩序的性格をあらはすから、その標徴たる貨幣の概念が「經濟學」の認識論上の客觀的な表徴だといふのである。經濟生活における全体としての嚴密な統一性、秩序性および合理性の實現は、經濟的評價の計算單位たるならんかの普遍的標徴を前提としてのみ可能である以上、さうした計算單位の普遍的標徴たる貨幣を經濟學的認識の枠たらしめようといふ考には、すこしも無理はみとめられない。「所有」「交換」などといふ概

念をすて、「評價」の標徴としての貨幣を考へたことは、わが論理主義者のたしかな進歩であらう。だが、この進歩は部分的にはイギリス學者への接近にはかならない。さらに筆者は考へる「想ふに評價社會の合理性を支持して、かゝる統一體を可能ならしむる根本則は限界利用法則（限界利等均等法則を意味するのであらう、さもなくば意味がとれない。解題者）に他ならないのである。經濟することの基本造構を明かならしむるものは、この法則を措いて、他にあり得ない。……かゝる限界利用法則の適當の形態として、即ち、無限なる價值判斷の極限値として、貨幣價值が客觀性をもつてくるので、これが評價社會の機能の表明だといつてもよい所以である。それ故にもし限界利用法則について……限界性に重心があるといふ理解にして許されるならば貨幣價值はかの法則の極限的表明であるといひたい。」と。貨幣概念は經濟のある歴史的な段階においてあきらかになつたものだが、一旦あきらかになつてみると、あらゆる經濟に安當するものだといふのは、そのやうな貨幣概念は「史的觀念」でないとい

ふことでなければならぬ。ひとつの概念が史的契機から成立しても、それが純化ないし轉化されてしまへば史的觀念でなくなるといふ一例をここにみる。杉村教授は貨幣中心論をすくふことによつて、むしろ左右田認識論をすてたわけではないかとおもはれる。貨幣概念を敢て限界利用法則といふ非歴史性の法則にむすびつけ、經濟學の構造にたいしてこの法則がもつてゐる目的性の意味にかゝはらしめて、貨幣はこの法則の客觀化であると説くことは論述の過程や用ゐられた諸概念に批評の餘地があるとしても、まさしく貨幣中心説の發展であり、その發展方向が「交換なき經濟（たとへば計劃經濟）への基本的考察にたいして、無意識に扉をひらいたものである」とみるときに、興味がある。だが、このことは論者においては意識的問題となつてゐない。「解題者註。この一項のみは他の機會にすでに發表したるも、そのゆゑに省略するは、本解題の讀者をして重要な一論を看過せしめる結果となる。ごく少數讀者の目には重複するを知りつつ、敢てかゝる。」——高田保馬 **蓄積理論の書き改め**は一九三二年二月

二十四日の執筆にかかる。「論集」の刊行遅延のため執筆と發表とのあひだに一年以上の上へだゝりが生じた。この一論が發表される二ヶ月前に、博士の「蓄積理論の修正」——説いて久留間氏の批評に及ぶ——が經濟論叢三六卷二號に發表された。同年十二月三十一日に脱稿されたものである。資本蓄積の理論は、一つには、蓄積進行の可能な條件を明かにし、二つには、第一の結果として、その行きづまりへの必然を明かにしなければならない。しかるにマルクスの理論はその條件の數へ方において足らぬところがあり、また、蓄積がいかにして過剰となるかといふ説明にも堪へない。擴張再生産が進行するために必要な條件としては、第二部門（消費財生産部門）の不變資本とその蓄積に伴ふ追加不變資本との和が第一部門（生産財生産部門）における可變資本と資本家消費部分、追加可變資本との和に等しくなければならぬ。だが、マルクスの假定のごとく、第二部門の蓄積率が第一部門の蓄積によつて決定されるものとしても、または、兩部門の蓄積率が一定のものであるとしても、兩部門間に資本の移動の存する

かぎり、蓄積の行きづまりはない。生産部門間の釣合の失はれることはあつても、一般的生産過剰すなはち「蓄積過剰」はありえない。蓄積過剰の成立を説明しえない理由は、兩部門の比例を $C_1 + b_1 C_2 \parallel V_1 + a_1 + b_1 C_2$ として見るのみで、 $b_1 C_2$ と $b_2 C_1$ または $b_1 V_2$ と $b_2 V_1$ のあひだにも一定の釣合の存すべきことを忘れてゐることにある。さらに固定資本の存在を考慮の中にいれなければ、資本増加と生産増加との關係を明かにすることができない。一般的過剰生産成立の條件としては、「資本消費率の變化と蓄積の速度」を考察することが最も肝腎である。「購買力が未だ二倍にならざる期間に於て資本が十倍近くにも増加すると云ふ事實」は、かくしてのみ説明されるであらう。——手塚壽郎 **心理的經濟價值説の歴史的研究の一節** チュルゴーの *Valours et monnaies* の想

あるべきこの問題の史的探索の十八世紀にかゝる部分の一端が、この一論である。「十八世紀に於て、價值を人間の欲望のみに基礎付けようとした者は、チュルゴーの他にはない。」「最も大膽なる心理的經濟價值論が、重農學派の思想を可成り深く入れてゐたチュルゴーによりて考へらるゝに至つたことは驚くべき事實である。」「そこで、重農學派的價值論から、かれを心理的價值論へ變轉せしめる動因となつた想源としてグラスラン *Graslan* (1777—1790) の述作をあげ、その述作の内容を紹介する。チュルゴーの價值思想轉動の因由をグラスランに求めることは、すでに E. Morand (*La theorie psychologique de la valeur*) にあるよし。筆者は結末においてチュルゴー「價值と貨幣」における價值説とグラスランのそれとの類似点を對照してゐる。片鱗であるが、學說史家としての筆者の抱負を窺はしめねばやまない慨がある。——上田辰之助 **トム・マゾ・ダクキーノに於ける財の觀念について** は序論および本論から成る「福田博士と聖トマス經濟學」と題する序論(十一頁)こそ、この大いなる追憶論文集にとつて最もふさはしき意義ふかき部分であらう「先生は吾

が經濟學界に於ける聖トマス學の先驅者であり、開拓者であつて、現今吾邦に於て中世經濟思想の研究に専念する者は何れも先生の古典的名篇「トマス・ダクキーノの經濟學説」に直接間接の學恩を負はざるはない。……に聖トマスは經濟學者福田博士にとりてアルフワにしてオメガであつた。何故ならば、この中世哲人の社會・經濟に關する論考は青年學者福田徳三の學問的門出を飾るべく最も輝かしき研究題目を興へたるのみならず、其の晩年に至りては厚生經濟研究者としての博士のために豊かなる『第二思想』熟成の酵母となり、其の生涯に於ける春華秋實兩つながら誠に不思議な因縁によつて聖トマスに繋がつてゐるを以てである。筆者は、故博士が聖トマス經濟學の研究に志された事情について、考證的回顧をくはだて、非常に周到綿密な記述のなかに、學者としての故博士の輪廓をゆかしく及びあがらせてゐる。——梅田政勝 **貨幣の價值の特性は、貨幣論の部門に屬するので、巻頭の井藤半彌祖稅原則論の諸問題(財政學)とともに、本解題からは省かれる。**——山田雄三 **ヴィルブラントの實踐經濟學は** 1) 開題(2) ヴィルブラントの企圖(3) *Motus*

Opportunitiesとしての經濟(4)人口及び經濟形態(4)人口及び經濟形態(5)ヴィルブラントの所説と限界利用學說の構想(6)政策と理論の六節にわかれる。結論には「經濟學と實踐的要求とを結びつけんとする種々の解釋のうちにあつて、經濟そのものの本質を實踐的なものとなす氏の主張は、屢々斯かる場合に經濟外的なものが混入されたり或は實踐一般が語られたりすると較べて、慥に顧らるべき議論である。……而してヴィルブラントの難点は限界利用學說の踏襲にあつたことを認めざるを得ない。限界利用を棄てても、經濟が *Natural Opacity* と解し得ること、即ちヴィルブラントが限界利用學說の核心と認めた見解そのものを保つことができる。逆に限界利用を固守するならば、吾々は第一にその客觀的指標が正しく擱まれなかつたこと、第二に理論を實踐經濟學的に考へる場合に不統一を免れなかつたこと、の二つの弱点を見出さざるを得ない。」

＊堀經夫 經濟學史要論 (第三分冊・正統學派中

續き 昭八・八、弘文堂、獨判、目次八頁、本文三九五—六八九頁通し頁) 註180、第一分冊は一九三一年六月、第二分冊は一九三二年九月の發行、昨年度本

解題一六・一七頁必ず參照。さきの第二分冊は第三章にあてられたものの約三分の一にあたる。この第三分冊ではジョン・ステューアート・ミルと、かれ以後の正統派學者におよび、それで正統學派全体がむすばれる約束だつたが、「種々の理由によつて、この第三分冊には、前の第二分冊の第三章の續き第五節乃至第十節を第四章として收めた。ジョン・ステューアート・ミル以下の諸學者は最初の豫定を變更して、之を次の第四分冊で取扱ふこととする。」結局、この著作がどれほど大きな勞作となつて完結をつけるであらうかは、學界にとつて一つの興味ある期待である。この一冊は、第十九世紀前半の諸經濟學者(續き)として、まづリカドウの承繼者および反對者ジェイムズ・ミル、マカロック、キンシイ、マルサス、ベイリイを一括し、つぎにマルサスの經濟原論承繼者としては一匿名氏およびチャアマズをとおりあつた、第三に、十九世紀のイギリスにおける三人の有名な女流經濟學者のうち、この時代に屬するマアセット夫人とマアティノウ嬢の二人を紹介する。いづれも獨創はないが、學問の通俗化に貢獻した啓蒙家たちである。それから「主觀學派の先驅者」と稱せられる一團があらはれる。ジョ

ン・クレイグ、キリヤム・フォースター、ロイド、トマス・シイ・バンフィールドその他。つぎにオクスフォード大學に經濟學の講座が創められて最初にこれを擔任したシニョア、つぎのホエイトリイ、およびダブリン大學の最初の經濟學講座擔當者ロングフィールドの三人を一括する。さて、リカドウと同時代に「富の分配」と題する書物をあらはした、主なる學者三人のうち、トムソンをのぞき、ジョウンズとラムゼイの兩人をとりあつて、この第三分冊をははる。こころみに、主觀學派の先驅者のひとりジョン・クレイグの價值論が略説されてゐる箇處を摘出してみる。「スミスは水と金剛石との例を用ひて使用價值と交換價值との對立を論じた。クレイグはこの對立論を以て不充分なりとなし、勿論空氣や光線の如く、大なる使用價值を有し、而も全く交換價值を有たない物もあるが、併しこれ等の物は、『異れる國及び異れる時を比較することによつて、諸國民の富の盛衰の原因を確かめようとする所の經濟學』の關知せざるところである」となした。そこで經濟學の對象となり得る物、即ち『人間の知識又は努力によつて其の分量が増減され得

る物」について観るに、これ等の物の使用價值と交換價值とこそは對立する代りに正に並行するものでなくてはならない。この事實を逃したる點に、スミスの誤謬があると、彼は論じた。かくの如く經濟財の使用價值と交換價值との並行關係を強調したることは、クレイグが主觀學派の先驅者の一人に加へられた所以である。(五〇八頁)この一節を見ても興味ふかく感じられることはアダム・スミスにおける使用價值概念がリカアドウによつて素朴ながらはめじて科學的概念とはなつたが、それと交換價值との理論的關係が積極的に追求されたのは、リカアドウの原論公刊の直後(一八二二年)であつたといふこと、かゝる思索の繼承には時間の懸隔がなかつたといふことである。歴史の歩みは一般に考へられてゐるよりも小刻みであるが、steady でもあるといふことが、かゝる史書によつて示されてゐることはたのしい。クレイグを「主觀學派」の先驅の一人にかぞへる理由として、「使用價值と交換價值との並行關係を強調したること」があげられてゐるのも簡明適切である。

* 岸本誠二郎 分配の理論 (昭八・二、森山書店、菊判、序と目次二頁、本文三八七頁、索引一頁、50p)。オーストリア學派の經濟學は享

樂財の限界效用による價值規定を中心問題とするが、「これを一步發展せしめたる生産財貨の價值規定こそ、オーストリア學派の學者たちが懸命に研究しつづけた問題なのである。享樂財貨の價值規定で一致してゐた彼等は、この問題解決では全く歸一するところを知らない。」(序)その混沌の中に入つて、同學派およびその系統の分配論を批判したもの。すなはち學史的批判の書であつて、著者自身の「分配の理論」を体系づけたものではない。その結果は分配の靜態論の規定を旋回する以上には出られなかつたといひ、動態論的研究への進出のためには「價格論を捉へておく必要を痛感する」と著者は述べてゐる。——第一編一般理論第一章序論、第二章勢力説的分配理論(1) ユーガン・バラノウスキーの勢力説的分配理論(2) オツペンハイマーの勢力説的分配理論(3) デイルの社會法的分配理論第三章職能的分配理論(1) 職能論の一般的説明(2) 古典的歸屬理論(3) 歸屬理論的發展(4) 歸屬

理論の一般的批判(附論) 殘額説、第二編個別理論第一章利潤及び利子理論(1) 資本概念(2) 利子生産力説(ウィザー及びクラーク)(3) 節欲説(シニオア)(4) 利子時差説(ベーム・バウエルク)(5) 動態利潤及び利子説(シユムペーター)(6) 社會主義社會に於ける利子の問題第二章利潤及び利子の積極的説明(1) 利潤論(2) 商業利潤・企業利得及び利子、第三章貨幣の理論(1) 貨幣價格説(2) 貨幣の本質的規定(3) 貨幣の量的規定第四章地代の理論(1) 價格としての地代論(2) 差額地代(3) 差額地代理論の擴大(4) 絕對地代、第三編方法論的研究第一章古典的方法論(1) 方法論上の問題提出(2) 古典學派の方法論に關する論争(3) 歴史學派並にオーストリア學派の方法論(4) 經濟學に於ける方法論の轉換(5) クラークの靜態動態論第二章靜態動態論(1) 靜態動態論への道(2) シユムペーターの純粹經濟學の基礎理論(3) シユムペーターの基礎理論の吟味(4) シユムペーターの靜態と動態の一般關係吟味第三章結論。分配論はリカアドウによつてまづ理論の規定をあたへられたが、現代の分配論は、著者によれば、二種の形式であらば

れてゐる。(1) 分配は生産要因の職能そのものによつて決定されるか、(2) 他の何等かの勢力によつて決定されるかといふ問題形式である。但し、このやうな區分が正當なりやいなやについては手塚壽郎教授が疑問を提起してゐる。(商學討論九卷上冊一七七頁參照) 著者は第二の形式に屬するものとして、(1) ツガン・バラノウスキーの勢力説的分配理論、(2) オッペンハイマーの勢力説的分配論、(3) デイールの社會法的分配論を説き、第一の形式に屬するものとして、一般的説明にリカアド、ミル、クラーク、ベエム・パウエルク、シユンペーター、ウィツクスティードをあげ、古典的歸屬理論に屬するもの及びその批評として、ベエム・パウエルク、ウイザー、ヴァルク、シユンペーターをあげ、歸屬理論の發展としてはシユンペーターおよびハンス・マイヤーをあげる。歸屬理論にたいする一般的批判としては、オットー・コンラードを紹述し、またリーフマンの限界収益説の根據を考察する。著者の根本思想の一端をうかがふべく、こゝろみにその一節を引く。「限界效用説によつて歸屬理論が失敗し、分配理

論が價格論に墮することを見過しうる以上は、『價值』を放棄し『收益』によつて進まんとするかかる經濟學の成立するのにも理由なしとせぬ。リーフマンは限界效用價值學説の困難を充分に知るが故に、限界收益説によつて進まんとした。しかしこの試みは價值の問題を解くことによつて進まんとしたものでなく、むしろ價值論の問題を放棄することにより、困難を避けんとしたものである。この点に於て他のいくつかの『價值なき價格論』とその軌を一にする。かかる經濟學に對して吾々の忘れてならぬことは、問題は回避し放棄することによつては解決されないといふことである。オーストリア學派の經濟學は價值論の解決に於て困難に逢着したが、價值論を解くことを以て理論經濟學の基礎作業と考へたそのことには、毫も誤がなかつたと考へなければならぬ。」(一八頁) 手塚教授のいふごとく、この著作が「塊太利學派を中心とした分配理論の研究としては、今ままで我國に於て公にされしものうちでは、最も全面的な研究であり、最も精細な研究の一つ」であることは、何人も争はぬであらう、

一五八

そして、かかる著作が短期間の準備による「講義の一產物」であるといふにいたつては、また、何人もおどろかざるをえないであらう。手塚教授はいふ、「著者の序文を信すれば、此著作はわづかに一年半のうちに出来上つたやうであるが、それは恐らく著書の形態を整ふるために費された時間が一年半であると云ふ意味に過ぎぬと思はれる。想像を逞しくすることを許さるるならば、著者は長年月の間塊太利學派を中心とした經濟諸學説に沈潜せられてゐたのであらう。」と。著者がこの著作のために幾年を費したかは問はずともいい。だが、いつたい、學說史的研究の範圍では、一つの系統のなかに沈潜することは、必要でもあり、やむをえないことでもあるが、經濟原理、そのものの研究を究極目的としてゐるものが、いきなり一學派の系統にのみ沈潜することは危険なしとしない。この危険は、研究家が學説のたんなる咀嚼と理解とに努力を集中してゐるかぎり、問ふにおよばないが、それを越えて批評に力のかたむけようとするにあたつて、かならず發生するのである。そのやうな批評は、いかに正鴻を

えてゐるかに見えても、大人の背におんぶしてゐる子どもが、背中のおへで大人をぶつてゐるのにひとしいことが多い。經濟學の研究を志すものが、イギリス古典派の一瞥をも經ずして、いきなりオーストリア學派へ飛びつき、さて、その批判を逞しうしてのち、とりあえず自家獨自の一夜つくりの体系にとりかゝるといふ圖は、この國において、われわれの目撃したところではなかつたか。科學は決してそのやうな科學者を喜ぶものではない。著者にたいしても、もちろんこれは當面いふべきことではないが、分配論の問題形式そのものについて、キヤナンの所説こそかへりみらるべきであるといふ一針を打つた手塚教授の言葉（前出雜誌一七八頁）は、この著作にたいする批評として、意味深長である。

* 大熊信行 **文學のための經濟學**（昭ハ二一、春秋社、四六判、序と目次一六頁、墨書四四頁、本文三三四頁、索引一五頁、ヤ、ヨ、リ）「文學の商品性および商品としての特殊性」なる副題を本文にもつ。著者の時間配分論の特殊適用。近代娯樂、わけでも諸藝術の存在形式の變革とその商品性の發展を考察し、文學の需要

構成を分析して、あらたに時間要素を強調する。「文學の供給および文學者の社會的な存在のしかたを根原的に制約してゐるものが何であるかを説くに、經濟配分の法則をもつてし、文學の需要、わけでも讀書時間を根原的に制約してゐるものが何であるかを説くにも、おなじ配分法則をもつてするといふことは、この試論に、全体的統一性をあたへえたゆゑんであるけれども、一般讀者に法則そのものの科學的認識をしひることは、むしろこれをさけた。」（三二七、三二八頁）とも斷つてゐる。また「著者は經濟學者のはしくれではあるが、まだ視野のきはめてせまいもので、十幾年ひとつの經濟法則の研究にたづさはり、遅々としてその研究をしあげることできない人間である。」と告白し、「じつは本篇のごときも、その法則の考察のあひだからうまれた偶發性の副産物たるにすぎない。」（三〇八頁）と辯解する。「われわれの考察の範圍では、むしろ問題を當面の現實にかぎらず、社會主義社會における文學および文學者のあひを現實と對照的に考察することによつて、現象の本質が何であるかをつきとめようと

する。その意味では、文學の商品性のみならず、むしろ商品性のうしろにあるところの一般的な經濟制約に焦点をむけてゐるのである。……商品としての文學がうけてゐる歴史的な規制のうしろに、およそ經濟といふものもがつてゐる永久の性格をみぬくことの必要は、あたらしい經濟秩序をまちのぞむものにとつても、みづから其秩序を建設しようと思意してゐるものにとつても、一樣に必要なではない。……あらゆるものは他のものとの相互關聯において、たとへば文學は、そのたの藝術および娯樂との關聯において、さらにあらゆる生産活動および消費對象との關聯において、その存在を制約……されてゐる。」（三〇八—三二〇頁）「文學が社會的にうけなければならぬ制約は、おなじやうに他のすべての文化的所産（その最低度のものから最高度のものにいたるまで）が、うけなければならぬ制約であり、この制約を經濟的制約となつてくれば、經濟的制約は本質的には社會的條件以前の條件にもとづいてゐるのである。人類がその精力と活力において限定されてをり、活動の時間

——わけてこの時間、制約を考察すること
は本篇をつらぬく一特徴であるが——において限定されてをり、自然の豊度ならびに技術一般において限定されてゐる以上、さうした物質的諸限定のうへにたつて、生活全体の統一を可能ならしむためには、社會的生產のいかなる形態をとはず、この基本的な經濟制約は『社會的關係の全体』をつらぬいて支配しなければならぬであらう。文學が商品であるといふのは、文學の歴史的な存在のしかたであるけれども、文學が社會的慾望の對象として服さねばならぬ根本的な制約は、それが商品たることからきてゐるのではない。(本文二二三頁)これがこの著作の基調である。諸藝術の存在形式の變革にともなふ商品化の過程については、藝術の形式を「物体的形式」および「人体的形式」の二種にわけける。第一類は藝術家の個人的存在から分離したところに形成され、その形式は事實上物質体形成である。彫刻・繪畫・工藝・音譜・文學作品等。第二類は藝術家の生ける肉体的機關をとしてその機關を主たる手段として形成され、その形成は事實上人間的存在をはなれては

ありえない。音樂の演出・舞踊・劇等。問題の考察点は、第二類の藝術形式が近代における二三の機械技術的發明によつて、第一類の存在形式に轉化し、したがつてその商品性を急激に高めつたといふ点にある。(九〇—一四〇頁參照)複製藝術の問題に關しては、主として長谷川如是閑氏の映畫論を反駁してゐる。なほ、「經濟哲學」を説くものが、左右田博士以來哲學上の價值概念と經濟學上の價值概念とを安易に結びつけてあやしまぬ一風潮にたいして、據つて生ずる根據を考察し、そのゆるすべからざるゆゑんをも説いてゐる。だが、この問題は、事の序ではなしに、もつと正面から後日余蘊なく論究さるべきである。

*小泉信三 師・友・書籍 私の評論集(昭八・六、岩波書店、四六判挿繪一三葉序六頁、本文三一四頁、P. 100) 序文を水上瀧太郎氏が書いてゐる。著者の隨筆集とおもへばいい。なかなか「我が愛讀書」「文學者と經濟學」「ミカエル・バクウニン」「經濟學學習書」「マルクシズム評論概要」「英國に於けるマルクス價值論論争」など、わけて經濟學生の往見してしかるべきもの。

*小泉信三 ソヴェート計劃經濟 (昭七・二、春秋社、菊判五七頁、豫約) 世界經濟問題講座第三回、第一部、世界經濟總論中の一冊に屬す。市場經濟と計劃經濟・ソヴェート計劃經濟の三期・戰時共產主義・新經濟政策・生産力の恢復と新建設への發達・五個年計劃の原則・ゴスプラン・ソヴェート經濟組織・五個年計劃と其成績・五個年計劃の短所(A)生産物品質の低下(B)比例的生産の困難等十四項目にわかれてゐる。

*野村兼太郎 明治維新と日本資本主義の發展 (昭七・二、春秋社、菊判七二頁、豫約) 世界經濟問題講座第二回、第五部、日本經濟と世界經濟中の一冊に屬す。明治維新と日本資本主義(徳川社會の本質・經濟的矛盾・町人階級の本質・政治的矛盾・社會的矛盾・西洋資本主義の東漸・指導理念・維新社會の本質・各階級に及ぼせる影響)日本資本主義の發達(準備時代初期を明治十三年頃まで、同後期を日清戰役まで、發展時代初期を日露戰役まで、同後期を世界大戰まで、成熟時代を昭和三年までとす)の二部にわかつ。

*藤林敬三 資本主義産業と技術の問題 (昭

八・二、春秋社、菊判五〇頁、豫約）世界經濟問題講座第五回、第二部、世界經濟の現勢中の一冊に屬す。資本主義的産業技術と其の意義・現代産業の技術的發展傾向・現代産業技術と資本主義的諸關係・技術的發展と生産關係。

＊作田莊一 世界經濟學——經濟學全集第六〇卷一

（昭八・四、改造社、四六判、序及目次八頁、本文三五七頁、豫約）「世界經濟學は經濟の新しい部門であるから、今の所では種々の見方があり、また問題とする所も人々によつて同様でない。この一篇は世界經濟學の概論として、世界經濟の全般を概略に解説する目的を以て書いたものである。」（はしがき）「この一篇は從來の餘りにも抽象的な經濟原則を特に世界經濟原則として書直した観もある。私はこのやうな世界經濟原則に對立するものとして、眞の國民經濟原則を樹立する必要を感じる。」（同上）と。著者の抱負を知るべきである。著者独自の用語のもちゐられてゐる場合は少くないが、讀者がその解釋にまよふことは決してない。著者は稀に見る獨立不羈の思索家であつて、言々句々著者の息吹よりいづる觀がある。「凡

そ我等が何かを知らうとするに當つては、その關心又は態度に二の大きな差別がある。その一つは對向せる現實に就て何が如何に存在するかを見留め知らうとする關心であり、その二は目的の實現に就て何が如何に適合するかを見分け知らうとする關心である。一は何が如何にあるかを知らうとする觀照的態度であり、二は何が如何にあるを可とするかを知らうとする實踐的態度である。」さて經濟學は如何と言ふに、これは研究對境によつて限定されたる科學なれば、それが觀照科學なるか實踐科學なるかは、對境たる經濟生活の性質によつて定まるのである。經濟生活が現實の認定の對境たることは言を須たないが、この同じ對境は又人間生活の一部面であり生活意志の實現であるから、我等の知らうとする關心は、現實が何であり如何にあるかを知る以上、目的の實現に於て何が如何に適合するかを知らうとするにある。この適合判定

は現實の行動のみでなく、その過程の中に取入れられる限りは、外界の地物の運動する自然過程と雖も亦目的實現の方面から判定の對境に收められる。かくて經濟學の研

究任務は、經濟生活に對する觀照的研究又は認定的研究と實踐的研究又は判定的研究との二つを包含する。この場合に前者が先づ行はれ、これを前提として後者が試みられる。二者の止揚の歸一が考へられない譯ではないが、そこまで到達し得るとしても二種の研究の並立及び關係が拒否されることはない。」これらの言葉にも著者の根本思想と學風をうかがひうる。

＊馬場敬治 技術と經濟——現代經濟學全集第三

一卷一（昭八・六、日本評論社、菊判、序文一九頁、

目次一四頁、本文四八六頁、豫約）表面上本書

の主題となつてゐる技術と經濟の關係を説いた部分は、第二部第三章（十九頁）であり、わけても單に〇三説の叙述に費した六頁にすぎない。かくて、この点について著者がみづからなんら積極的な思索の跡を示してゐないといふことは、この著作が讀者に重大な不満をあたへる理由となるかもしれない。それにもかゝらず、この著作は、全体としてみれば、一面工學者たる馬場敬授にのみひとり期待しうるやうな性質のものである。一卷を二部にわけ、第一部技術の本質、第二部技術と經濟とし、附録に「技

術と經濟社會との關係に關する一學說としてのテクノクラシー」をそふ。外國諸學者の文獻にわたること、極めてまめめしいけれども、やゝ送迎にいとまなき觀がないでもない。

* 向井鹿松 統制經濟原理 — 日本統制經濟全集

第一卷 — (昭八・六、改造社、菊判四六四頁、四三〇)
現代の國民經濟は技術の必然性から管理經濟、計畫經濟に向はねばならぬことを認めつつ、そこに限界のあることを主張する。人間は機械化することができないかぎり、完全なる管理經濟は不可能であるといふのである。經營學者によつて書かれた原理的な著作の一例。非常によくこなれてゐるけれども、理論經濟學者を刺戟する要素に乏しい。

* 土方成美 統制經濟政治機構 — 日本統制經濟全集第七卷 — (昭八・七、改造社、菊判三二二頁、四三〇)

「私の執筆した部分は、第一章の政治と經濟、並に、伊太利の統制經濟機構のみで全書籍中の小部分である。」(著者はしがき) 他は長守善氏が筆を執つたとある。

* 高橋龜吉 日本經濟統制論 — 日本統制經濟全集第五卷 — (昭八・四、改造社、菊判四七四頁、四三〇)

「現在、日本に於ける經濟統制の實情を、流轉の相に於て描き出すこと」を主眼としたもの。高橋經濟研究所々員の「綜合的共力」に成るものだといふ。

* 河合良成 價格統制論 — 日本統制經濟全集第三卷 — (昭八・二、改造社、菊判二八四頁、四三〇)

* 小島精一 日滿統制經濟 — 日本統制經濟全集第八卷 — (昭八・八、改造社、菊判四〇一頁、四三〇)

加瀬三郎、稻葉四郎の兩氏も部分的に執筆してゐる。

* 小島精一 非常時統制經濟論 (昭八、日本評論社、菊判二六三頁、四三〇)

* 森 武夫 臨時統制經濟論 (昭八・一、日本評論社、菊判序一七頁、目次一八頁、本文六二八頁、索引二五頁、四三〇)

* 林 要 貨幣のない社會 (昭八、大畑書店、四六判三七〇頁、四三〇)

* 眞傳松 社會學より經濟學へ (昭八・二〇、京都新星堂出版部、菊判、五五三頁、四三〇)

* 今川 尙 分配學說研究 (昭八、京都弘文堂、菊判一八一頁、四三〇)

* 荻山健吉 メンガーの高次財價值論と利子及利潤論 (昭八・七、菊判二九頁、非賣) 「商研パンフレット第一號」とあり。

* 西村眞次 日本古代經濟 (交換篇第四冊、貨幣(昭八・一〇、東京堂、四六倍判、序文及目次一三頁、本文二七四頁、脚版二、挿圖三〇、四三〇)

交換篇は全五冊より成る。この一冊は第八章貨幣の全部を収めてゐる。裝釘用紙印刷等めづらしく立派な書物。

* 山中篤太郎 日本社會經濟の研究 (昭八・三、森山書店、菊判二九頁、四三〇)

この著者には「日本勞働組合法研究」(一九三二年)「米價政策の研究」(一九三三年)の著作がある。この著作は日本資本主義の分析を目的とする。今日、資本主義部面の分析が急速に發展したにくらべて、「その背後にかくされてゐる非資本主義的な日本經濟の部分はまだ暗闇の中に残されてゐはせぬか」といふのが、著者の考察の出發点である。一方では重要産業統制法、財閥にいたるまでの日本資本主義の精髓を描出するとともに、その下に支配される膨大な封建的、前資本主義的經濟機構への考察をも試みる。日本産業革命・産業革命と日本人、前資本主義的産業組織・日本獨占資本主義・産業合理化・日本資本主義の特殊性と組織勞働の六章から成る。

*服部文四郎 **經濟實踐** (昭八、明善社、菊判四二頁、¥ 250)

*御園生桂三郎 **工業經濟學** (昭八、東京旭印

刷株式會社、菊判、五三四頁、¥ 350)

*柿花啓正 **天晴地明經濟學論** (改訂) (昭八、

二松堂、菊判二七六頁、¥ 250)

*太田正孝 **經濟の變革** (昭八、太陽社、四六

判二七八頁、¥ 150)

*清水芳太郎 **日本經濟革命論** (昭八、千倉書

房、四六判三三六頁、¥ 250)

*高橋龜吉 **非常時經濟** (昭八、千倉書房、

四六判例言及目次一二頁、本文四〇三頁、¥ 250)

インフレーションは金再禁止前後から昭和

七年秋の臨時議會前後までのものと、昭和

八年度豫算問題以降のものととは本質を異に

する。後者は軍費中心のものである。この

區別は一般にみとめられず、前者の性質に

おけるインフレーション中心の政策及見解が維持

されてゐる。これに對抗して、財政、金融、

經濟、景氣問題を解剖し、その動向並びに

對策をとりあつた論稿を集成したも

の。

*室伏高信 **マルクスを乗り越えて** (昭八、

千倉書房、四六判三八二頁、¥ 250)

*竹中勝男 **社會主義と基督教の經濟倫理**

(昭八、警醒社、四六判三三六頁、¥ 250)

*峰地光重 **生産の本質と生産教育の實際**

(昭八、厚生閣、菊判三二六頁、¥ 250)

*細野孝一 **各國インフレーション形態の**

研究 (昭八、千倉書房、菊判四五五頁、¥ 300)

*小島昌太郎 **インフレーションの金融と**

經濟 (昭八、立命館、四六判一四九頁、¥ 200)

*今西正雄 **景氣研究の諸問題** (昭八、凡進

社、菊判二九四頁、¥ 250)

*武田鼎一 **統制經濟の基本理論** (昭八、敬

文堂、菊判二二七頁、¥ 300)

*武田鼎一 **經濟價值研究** (昭八、大阪甲文堂、

菊判一五七頁、¥ 250)

*改造社編 **經濟學辭典** (中) — 經濟學全集第

五七卷 — (昭八、三、改造社、四六判、四二五—八二

三頁(通し頁、豫約)

*改造社編 **經濟學辭典** (下) — 經濟學全集第

五八卷 — (昭八、六、改造社、四六判、八二四—一〇

七九頁(通し頁、索引一—七頁、豫約) この辭典

の上巻は昭和七年八月に刊行されてゐる。

一貫していはゆる「新興經濟學」(マルクス

經濟學)の立場において編纂されてゐるの

で、事情のわからない經濟學の初學者など

が、教科書の勉強に利用しようとして、め

んどくらふこともすくないらしい。「本辭

典は一切の既成經濟學の見解に囚はれず、終始一貫して明確な新興經濟學の立場に立つ。」(上巻序) 伏字が所々に用ゐられてゐるのも辭典として奇異である。

*高橋龜吉(監修) **國民經濟辭典** (昭八、

一、非凡閣、四六判、六三五頁、¥ 250)

これらの經濟學辭典に「食まれざる實踐經濟道

程の重要にして新たな領域」(凡例)をひ

らいたものといふ。執筆者は稻村隆一、上

條愛一、喜入虎太郎、河野密、小松三郎、

田村勘次、田所輝明、角田藤三郎、速見成、

平野學、三宅正一、源八郎、渡邊潜、編輯

者は田所輝明、松元元竹二の兩氏。各項目に

責任者の署名をみる。

*東洋經濟新報社編 **日本經濟年報** 第一〇

輯昭和七年第三四年期 — (昭七、一二、同社、四六判

本文三一〇頁、附録五四頁、索引四頁、¥ 250)

第一部支那分割の運動とアジア問題の新た

な段階、第二部インフレーションの發展と

其の歸結、第三部各經濟部面の分析と見

透。

*東洋經濟新報社編 **日本經濟年報** 第一一

輯昭和七年第四四年期 — (昭八、一二、東洋經濟新報

社、四六判、本文三〇九頁、附五五頁、索引六頁、¥

1000) 第一部世界政治の動向と國際聯盟、
第二部軍事費の膨脹と日本財政の危機、第
三部各經濟部面の分析と見透。

* 東洋經濟新報社編 **日本經濟年報** 一、二
輯、昭和八年第一、四年期 (昭八・五、東洋經濟新報
社、四六判本文二九三頁、附録二九四―三五五頁、
索引六頁、¥3.00) 本輯の分擔執筆者は、梶
井、岡部、石橋、周東、齋藤、綿野、根津、
村山、山田、大原、壁井、前田、石原等十
數氏。第一部 世界經濟危機下の米國金融
恐慌、第二部 國際軍備縮少と列強軍備の
動向、第三部 各經濟部面の分析と見透。

* 有澤廣己 **日本經濟統計圖表補** 一經濟學全
集第五四卷一 (昭八・二、改造社、四六判 四六三
頁豫約)

*

* 手塚壽郎譯 レオン・ワルラス **純粹經濟學
要論上卷** (昭八、森山書店、菊判二七七頁、¥
2.00)

* 増井幸雄・戸田正雄共譯 **ケネー經濟表** (昭
八、岩波書店、岩波文庫、¥0.00)

* 渡邊信一譯 ハインリヒ・デーヴィツェル
價值論の學說價值 (社會文庫第一六册昭八、日
本評論社、四六判九三頁、¥0.30)

* 藤田清譯 レオ・ケツペル **限界效用説と**

マルクス主義 (昭八、日本評論社、四六判一六二
頁、¥0.60)

* 小島昌太郎監修邦譯 ズンバルト **三つの
經濟學** 一經濟學の歴史と体系一 (昭八、雄風館、
菊判四二〇頁、¥2.50)

* 森澤昌輝 ホブソン **失業の經濟學** (昭八、
一〇、同人社、四六判、序二頁、本文二六頁、
¥0.80) J. A. Hobson, "The Economics of
Unemployment" (初版一九二二年) の第三
版(一九三〇年)の全譯。譯者は昭和五年に

「失業經濟學」と題して、一度舊版の翻譯
を刊行してゐる。「ホブソンは英國労働黨
有數の論者であるが、現在すでに七十五歳
の高齡であるにもかゝらず、その論法ま
す／＼流れてゆくやうに見え、最近ではイ
ギリスにあつてはケーンズと並んで、經濟
學の論壇における人氣者である。ケーンズ
が現下の世界經濟恐慌の破局的進行に當面
するに及んで、かれの年來の持論たる自由
貿易論を破棄して保護貿易主義者に轉向し
たに對して、ホブソンは終始一貫その過少
消費説を把持しつつ、保護貿易論者へ挑戰
してゐる。(譯者序)

* 岩田百合治譯 ホブソン **現代經濟恐慌
と資本主義の將來** (昭八、章叢社、四六判九一

頁、¥0.60)

* 藤田稔靖譯 **ビックハン 國民經濟原論**
(昭七、積文館、四六判三〇四頁、¥2.50)

* 經濟批判會譯編 **資本主義の「計畫經濟」**
一世界經濟叢書101一 (昭八・二、叢文閣、四六判一八
九頁、人名索引三頁、¥0.80) 「計畫經濟」ある
ひは「統制經濟」といふ用語によつて、こ
の國で、まるでちがつた諸問題が、やか
ましく論じられはじめてゐるときに、マル
クス主義者の立場からこの問題の主要資料
をまとめたもの。第一部では問題の概觀を
あたへ、第二部では一九三一年八月の「計
畫經濟世界會議」(アムステルダム)につい
ての諸報告をあつめ、第三部ではこの思想
の發祥地たるアメリカ合衆國をはじめ各國
別の資料を紹介する。資本主義と計劃經濟
は互に矛盾するといふのが、この著作の根
本思想であることはいふまでもない。

* 經濟批判會譯 **ヴァルガ 世界經濟年
報** (18) (昭七・二、叢文閣、四六判一七七頁、索
引三七頁、¥0.80) 一九三二年第二四半期に於
ける經濟及び經濟政策(一九三二年七月二
十五日締切)第一部ドイツに於ける政變の
經濟的基礎(價值生産物の分配、ブルジョ

*經濟批判會譯　ヴァルガ　世界經濟年

アールとプロレタリアートとの闘争、餘利價值の分裂、ブルジョアジー、地主及び勤勞農民の對立・利潤の分裂、産業資本と貸付資本との對立・獨占資本と無組織資本家及び農民との對立・恐慌からの資本主義的血路か×××血路か?) 第二部 一般的部分 (恐慌は依然深刻化してゐる・信用恐慌と信頼恢復のお伽噺・ローザンヌ會議・外國貿易の萎縮とオッタワ會議・農業恐慌の新たな尖鋭化) 第三部 特殊的部分 第一ドイツ (景氣の一般様相・國庫資金が破産重工業を救済する・バーベン政府の農業政策・労働者階級の狀態のもう一段の悪化) 第二フランス (景氣の一般様相・商業政策と外國貿易・金融上及び資本市場・労働者階級の狀態 第三ポーランド (ポーランド恐慌の特殊事情・農業恐慌・工業恐慌・信用恐慌・労働者階級の狀態) 第四イギリス (景氣の一般様相・オッタワ會議とアイルランドに對する闘争・大借換第五アメリカ合衆國生産の減退・好轉が近い徴候はない・労働者階級の狀態・經濟政策の失敗・農業恐慌の新たな尖鋭化)。

報 (19) (昭八・二、叢文閣、四六判、二四頁、五〇〇) 一九三三年第三四半期に於ける經濟及び經濟政策 (一九三三年十月二十七日締切) 第一部 安定化の終末・恐慌の持續 (恐慌の終末についてのブルジョアジーの幻想・工業生産の狀態・投機的棉花強調の結果・金融恐慌は終らない・原料品の世界在庫高は減少しない・物價變動に轉向はない・資本の價値増殖は好轉しない・全面的商業戦争・一般的危機による循環性恐慌の性質の變化・見透し) 第二部 特殊的部分 第一ドイツ (バーベン政府の經濟政策・振興の前途・新たな銀行整理の企て・經濟政策をめぐる闘争の尖鋭化・『振興』後のドイツの經濟狀態) 第二フランス (經濟情勢は悪化する・農業保護政策の破綻・割當制度・國際收支・資本市場・國家財政の赤字・労働者の狀態) 第三イタリー (ファシス支配はイタリー經濟を救つたか? 農業工業・外國貿易・金融恐慌・労働者階級の擯取) 第四イギリス (保護關稅制度への移行・オッタワ會議・イギリスに於けるインフレーションの一年・最近數ヶ月の景氣・ランズベリー氏が労働者のために祈禱する第五アメリカ合衆國 (大統領選舉・

最近數ヶ月間の景氣・借地農の破局的狀態・労働者階級の狀態)。

*經濟批判會譯　ヴァルガ　世界經濟年

報 (20) (昭八・四、叢文閣、四六判、一五五頁、索引四頁、五〇〇) 一九三三年第四四半期に於ける經濟及び經濟政策 (一九三三年一月三十日締切) 第一部 一九三二年の總決算 (四年前と四年後・經濟恐慌の深刻化・經濟政策の失敗・帝國主義的諸對立の尖鋭化・階級闘争の尖鋭化と×××××の成熟) 第二部 戰債をめぐる闘争に照して見た帝國主義の諸矛盾 (戰債問題の意義・外貨拂問題・恐慌は一切の戰債協定を吹き飛ばしてゐる) 第三部 特殊的部分 第一ドイツ (經濟の逆轉と政變・樂觀論と今後の見透し・信用恐慌の繼續・經濟政策の混亂・農業恐慌と自給自足の幻想・労働者階級の狀態のもう一層の悪化) 第二フランス (景氣一般・農業恐慌・信用上及び豫算恐慌) 第三イタリー (景氣・ブルジョアジーの新しい對策・貿易及び貿易政策・労働者階級の狀態・財政及び見透し) 第四イギリス (景氣は好轉しない・外國貿易の相對的好轉・失業及び労働者階級の狀態) 第五アメリカ合衆國 (持續的な

景氣好轉は起るか、アメリカ合衆國の農業恐慌・景氣好轉のその他の諸障害、労働者階級の状態。

*朝日新聞社經濟部編 朝日經濟年史（昭八、朝日新聞社、菊判三八一頁、¥200）

*大竹博吉 マルクス記念論集「資本論研究」（第二輯）（昭八、ナウカ社、菊判三六二頁、¥200）

*大竹博吉譯 レオン・チエン 資本論研究（第二輯改訂）（昭八、ナウカ社、菊判三六二頁、¥180）

*米村正一譯 コムアカデミア經濟學研究所共同著作「ゲ・カズロフ編輯 貨幣と信用（資本主義篇）」（昭八・二、ナウカ社、菊判四三九頁、人名索引五頁、¥200）

*淡徳三郎・直井武夫共譯 ローゼンベルク資本論註解 第二卷（昭八、改造社、四六判五〇七頁、¥150）

*淡徳三郎・直井武夫共譯 ローゼンベルク資本論註解 第三卷（昭八、改造社、四六判四三三頁、¥150）

*大里傳平譯 カウツキー 資本論解説（昭八、岩波書店、岩波文庫、¥600）

*木寺黎二譯 ヤ・ロザーフ マルクス、エンゲルス、レーニン事項別著作目録（昭八、ナウカ社、菊判六三頁、非賣）

*岡本誠一郎、稻葉明男共譯 アベズガウス、ドゥーコル共著 辨證法的經濟學方法論（昭八、白揚社、菊判三八八頁、¥100）

*マルクス主義經濟學研究會譯 ペレジン、クリヴィツキー、ラスキン共著 經濟學入門「資本論」の方法論研究（昭八、中外書房、四六判、二八五頁、¥100）

*中野義雄譯 ペレジン、クリヴィツキー、ラスキン共著 資本論の方法論的研究（昭八、叢文閣、四六判）

*森戸辰男、筈信太郎共著 剩餘價值學說略史——經濟學全集第五〇卷——（昭八・七、改造社、四六判四四三頁、豫約）第一章 重商主義 第二章 重農主義 第三章 アダム・スミス 第四章 ダヴィット・リカルド 第五章 ロドベルトウス 第六章 トマス・ロバート・マルサス 第七章 トマス・ホーズキン 第八章 リカルド以後。

*宮田保郎譯 ポール・ティンチッピ ファツシズムの經濟組織（昭八・八、東京書房、四六判序二頁、本文一六七頁、附録一六九—二五七頁、¥250）“The Economic Foundations of

「The En」の完譯で「イタリーへ適用されたファツシズムの經濟政策に詳細な分析を與へた英語での最初の文獻」著者イタリーを訪問して、「ファツシスト經濟組織を調査し、生産、分配、貨幣銀行政策、國際貿易等々の領域に於て、ソヴェト經濟組織との諸々の類似点を見出し、その特質を論じた」もの。附録は(1)イタリーの労働法制解説(2)労働憲章(3)ストライキ禁止法の三種。

*宮田保郎譯 ゲルハルト・ドッペルトソヴェートロシヤの經濟組織（昭八、東京書房、四六判、¥150）

*賀川豊彦 鐘田研一共譯 アール・エイチ・トウニイ 宗教と資本主義の勃興（昭八、警報社、四六判 三八七頁、¥100）

*杉村廣藏 經濟性的問題（東京商大經濟學研究二）

*梅田政勝 經濟學と貨幣概念（商業論集八卷二號）

*難波田春夫 所謂「經濟學」と「經濟學以前」（經濟學論集三卷二號）

小宮孝 文化科學としての經濟科學（商學評論二卷三號）

石川興二

經濟本質論（一）（經濟論叢三七卷一、六號）

大道安次郎 經濟學說史の方法論的序説（商學評論二卷三號）

酒枝義旗

經濟の存在性に就て（一）（早稻田政治經濟學雜誌三〇、三二）

*

小泉信三 アダム・スミス藏書目錄新版（三田學會雜誌二七卷五號）

小泉信三 リカアドオ 著作及び手稿の發見（三田學會雜誌二七卷六號）

白杉庄一郎 アダム・スミスに於ける經濟史觀（經濟論叢三六卷六號）

竹中靖一 歴史家としてのアダム・スミスの面影（山口商學雜誌二三）

田中定 アダム・スミスの地代論（九州帝大經濟學研究）

小松芳壽 エドマンド・バークとアダム・スミス（早稻田政治經濟學雜誌三三）

山崎義三郎 ヘンリー・ジョージの「吾が土地及土地政策」に就いて（二）（國民經濟雜誌五四卷、六號）

内藤越夫 カール・カウツキー文獻（一）（大

原社會問題研究所雜誌一〇卷三號）

白杉庄一郎 アリストテレスの價值論（經濟論叢三七卷六號）

堀 經夫

英國に於ける主觀學派の發祥（經濟史研究四一號）

關未代策 ケーネーの學說（上）（政經論叢八卷一號）

山田秀男

勞働價值説の成立と發展と完成（經濟集志五卷三、四號）

手塚壽郎 厚生經濟學古の一節 — quo

beans と社會的爭鬭（商學討究七卷下）

田中精一 重商主義學說の基本的諸問題（經濟集志六卷三、四號）

山下英夫 社會的總資本の再生産に關するケーネーとスミスの學說（二）（商學論叢七、八）

下田 博 フイジオクラート以前の重農思想（三田學會雜誌二七卷四號）

下田 博 新マーカンチリズム（三田學會雜誌二七卷一〇號）

高橋誠一郎 梅園、萬里及び福澤先生の經濟論（三田學會雜誌二七卷一號）

高橋誠一郎 通貨論を中心として再び福澤先生の經濟論を觀る（三田學會雜誌二七卷

三號）

野村兼太郎 新井白石の經濟論（三田學會雜誌二七卷八號）

野村兼太郎

能澤蕃山の經濟論（社會經濟史學二卷八號）

古屋美貞 歴史的に見た米國經濟學的特質（同志社論叢四〇）

松澤兼人

五十忌辰に當れるトインビーの回想（社會政策時報一五〇號）

伊藤久秋 經濟學者としてのシヤール・

チイド（長崎商學研究會叢報二卷三號）

大野信三 浪漫主義の經濟學（經濟商業論叢三）

稻垣玄喜 チウネン集約度學說の圖表的説明（農經經濟研究九卷三號）

本位田祥男 中世の統一的世觀の經濟生活に於ける表現（經濟學論叢三卷八號）

高橋誠一郎 反利子思想の對內性（經濟學論叢三卷二號）

山川 均 吾國に於けるマルクシズムの發達（改造一五卷三號）

關未代策 現代佛國經濟學界の展望（經濟論叢八卷三號）

*

高田保馬 資本蓄積論について (社會政策時報一五四號)

高田保馬 蓄積過剰の必然(改造一五卷八號)

高田保馬 蓄積理論の修正 — 説いて久留間氏の批評に及ぶ— (經濟論叢三六卷二號)

高田保馬 生産力の自己運動 — 唯物史觀の批評— (經濟論叢、三六卷五號)

高田保馬 利子の資本蓄積に及ぼす作用 (經濟論叢三七卷二號)

高田保馬 純生産力について (經濟論叢三六卷三號)

高田保馬 労働の供給について (經濟論叢三七卷三號)

高田保馬 マルクスに於ける平均利潤率 — 柴田助教の平均利潤率論に論及す— (經濟論叢三六卷四號)

高田保馬 勞銀と利子 (經濟論叢三七卷五號)

高田保馬 人口に關する小論 — 向坂逸郎氏の批評に答ふ— (經濟論叢、三六卷一號)

高田保馬 唯物史觀の第三史觀への接近 (經濟論叢三六卷六號)

柴田 敬 資本論と一般均衡論 (經濟論叢三六卷一號)

柴田 敬 平均利潤論 (經濟論叢三六卷二號)

柴田 敬 平均利潤率再論 (經濟論叢三六卷三號)

五號) 柴田 敬 資本蓄積論(二) (經濟論叢三七卷一、二號)

柴田 敬 資本蓄積と資本の有機的構成變化(二) (經濟論叢、三七卷四、五號)

柴田 敬 一般的衡論と交換方程式 (經濟論叢、三七卷六號)

赤松 要 經濟生活の綜合的把握への首見 — 福田德三博士追憶論文集における杉村、宮田、大熊諸教授の所説について— (國民經濟雜誌五五卷二號)

宮田喜代藏 景氣の綜合的考察 (國民經濟雜誌五四卷三號)

杉本榮一 靜態的經濟學の破綻 (中央公論四八卷一〇號)

安井琢麿 純粹經濟學と價格の理論 (經濟學論集三卷九號)

新里榮造 パレート入門 (南邦經濟一卷二號)

土方成美 資本主義經濟機構に於ける價格の機能 (國家學會雜誌四七卷四號)

栗村雄吉 獨占價格の理論 (九州帝大經濟學研究三卷一號)

栗村雄吉 進獨占双方獨占及補完獨占到於ける價格理論 (九州帝大經濟學研究三卷二號)

栗村雄吉 一般均衡理論に於ける交換方

式の取扱に就いて(九州帝大經濟學研究三卷三號)

氣賀健三 價值と經濟的デイメンジョン (三田學會雜誌二七卷五號)

山田雄三 供給價格と生産法則との關聯 (東京商大經濟學研究二)

小泉信三 市場經濟と計畫經濟 (經濟佐來八ノ三)

小泉信三 ソキエト經濟と市場經濟 (社會政策時報一四八號)

河合 讓 經濟價値の構成原理 (南邦經濟一卷一號)

沖中恒幸 價格機構の階級的前提 (社會政策時報一五七)

氣賀健三 「價値論の諸問題」(二) ミーゼス及びシュビートオフ編纂— (三田學會雜誌二七卷八、一一號)

太刀川利男 モーアの供給の法則 (彦根高商論叢一四)

青山秀夫 マールの利子論 (經濟論叢三七卷六號)

南亮三郎 「生の生産及再生産」について (商學討究八卷七)

桐淵勘藏 技術經濟學の本質

木村健康 ニつの分配理論 (經濟學論集三卷

八號)

堀江保藏 資本主義の型 (經濟叢書三七卷五號)

伊藤久秋 企業の經濟的分類(一)(二)(長崎高商研究館彙報二〇卷五號、二卷一號)

伊藤久秋 カルテル概念に關する二文獻 (長崎高商研究館彙報二二卷四號)

伊藤久秋 文獻に於ける靜態動態の兩概念(一)(二)(長崎高商研究館彙報二二卷、七八號)

確永厚次 消費經濟論(一)(二)(商業論集七卷二號、八卷一、二號)

大熊信行 文學のための經濟學 (高岡高商研究論集六卷一號)

*

小泉信三 マルクスの價值論及び餘剩價值論 (社會政策時報一五四號)

新川傳介 アジア的生產方法の問題に就て (商業と經濟一三卷二號)

久留間敏造 高田博士に依る蓄積理論の修正 (中央公論四八卷四號)

久留間敏造 マルクスのワアゲネル批評 (大原社會問題研究所雜誌一〇卷三號)

織戸登代子 マルクス表式と擴張再生産の均衡關係 (經濟往來八ノ七)

櫛田民藏 小作料の地代範疇について

(大原社會問題研究所雜誌一〇卷二號)

小泉信三 マルクス死後五十年 (改造一五卷三、四號)

小泉信三 大森氏の批評 (改造一五卷九號)

向坂逸郎 マルクスの遺産(改造一五卷三號)

石濱知行 マルクスの生涯から (改造一五卷三號)

加田哲二 ドイツ國民社會主義の經濟觀 (三田學會雜誌二七卷三號)

向坂逸郎 ファッシズム經濟學 (中央公論四八卷四號)

高橋龜吉 日本産業統制の全貌 (經濟往來八卷三號)

土方成美 日本精神と統制經濟 (經濟往來八卷三號)

作田莊一 日本の國家と經濟(一)(二)(商工經濟研究八卷一、二號)

土方成美 我國民所得の構成と景氣の變動 附 國民經濟の動向(一)(二)(經濟學論集三卷一、二號)

難波田春夫 インフレーションと資本主義經濟の發展 (ダイヤモンド二卷九號)

大塚一朗 獨占産業組織の社會的影響 (經濟論叢三六卷五號)

長守 善 統制經濟の二つの型態 (ダイヤモンド二卷一八號)

稻葉四郎 アウタルキーと計畫經濟(世界經濟二卷六號)

小宮 孝 計畫經濟と資本主義の變革 (商學評論二卷二號)

鈴木源吾 經濟的調和の原理と經濟秩序 (南邦經濟一ノ二)

北澤新次郎 經濟統制と現代の經濟組織 (早稻田商學八卷三、四號)

中島正信 經濟統制と其の中心點 (早稻田商學八卷三、四號)

田中穗積 經濟統制の史的考察 (早稻田商學八卷三、四號)

宇都宮鼎 統制經濟と經濟の統制 (早稻田商學八卷三、四號)

財政學

*井藤半彌 統制經濟財政論 日本統制經濟全集第四卷(昭八、九、改造社、菊判四三八頁、昭和八)

財政はそれ自身が統制の見本であるから、財政統制といふ課題は意味をなさぬ。この

著作は、社會經濟に統制が強化された場合に、その一面たる財政生活（または財政形態）はどう變化するかといふ問題に答へるものである。ことに原理の方面を主とするのである。著者は統制經濟財政論の大綱を述べるために對照上必要な限度において、自由經濟財政論にも觸れる。全卷を三編にわけ、第一編統制經濟財政學と一般財政學第二編統制經濟の非常財源第三編統制經濟の經常財源。第一編では、まづ自由經濟と統制經濟の思想的背景を説くこと甚だつまびらかであるが、窮極的な基礎を個人および社會のいづれにおくかといふ點に兩者の別れるところを見る。つぎに一般財政學の方法論の問題にふれるのは、著者獨自の研究態度をあらかじめ讀者に諒解せしめる目的にいづ。第二篇第三篇はすなはち著者の研究態度が貫徹された姿である。著者の方法論的意識はいちじるしく高い。著者にとつてはおそらく出版者からうけとつた偶然的課題であつたのであろうが、一旦うけると、著者はそこに自家の學說を一定角度から表現し適用すべき十分なる領域を見だし、その仕事を非常に忠實に、そして美

事にやつてのけたものである。この叢書中には、刊行の期日におはれて、十分の推敲を経ずに、あはたゞしく書かれたらしいものや、他人に一部分の執筆をゆだねたものすらあるやうだが、この一冊にはそのやうな形跡の影すら見いだすことができぬ。文章にも、苦心の拂はれてゐることはたしかで、しかも一定の調子が最後までくづれてゐない。これらは、いはゆる全集ものに得がたいことがらである。財政學における今年度の豫期せざる收穫といふべきであらう。統制經濟の非常財源を説くうちに、ヨーロッパにおける臨時財産稅論爭史をかゝけたごときは、この書物の面白味をくはへたと多大である。

* 青木得三 財政學概論（昭八二、賢文館、菊判、序言及目次一〇頁、本文三六六頁、五、五〇〇）

「思ふに我國に於ける學問と實際との關係は財政の方面に於ける程疏遠なるものはない。即ち實際家は學問を尊重せず、學者は實際家を輕侮する。然しながら、何等の研究なく思索なく、唯當面を糊塗することを以て能事とせりとする財政家程國家社會を毒することの大なるものはない。」云々と序

文にいふ。本書は財政學と財政の實際とが疎遠なるべきものでないことを實證せんとしたものであると著者はいつてゐる。五篇にわかれ、總論、歳入論、歳出論、公債論、財政執行論とする。「財政學は經濟學の一分科である。經濟學の三分科、即ち經濟原論、經濟政策及財政學は皆人類の經濟活動を研究する。」といふのが、本文冒頭のことである。全く懷疑のない著作である。

* 神戸正雄 非常時の財源問題（昭八九、立

命館出版部、菊判序文及目次九頁、本文二七六頁、五、五〇〇）

いはゆる非常時、財政上からは「赤字時代」において、何をもつて歳入の不足に充つべきか。財源の探究は税制の整理よりも緊切である。著者最近の諸著作の不足を補ふべく書かれたもの。財政全局問題、直接税問題、間接税問題、官業問題の四部より成り、十編にわかつ。第一篇のインフレーション政策は公債による財政政策であるが、その弊害の重大なるを説く。第四篇の法人所得に累進課税すべき理由の十分にあることを説く。第五篇の異常所得の課税は、戦時利得税を參照して工夫せるもの、實施の必要を説く。第六篇は多收手段

としての酒税を論じ、課税方法を專賣に改造する好機なることを説く。第七篇は賣上税による奢侈課税が我國の時需に適合することを説く。第八篇の國有鐵道の民營化は半民營主義をすゝめるもの、第九篇は郵便料の引上をすゝめるのである。

* 高木壽一 **租税・公債政策** — 財政恐慌 — (世界經濟問題叢書第四部、世界經濟政策四回 (昭八・一春秋社、菊判五九頁豫約) 第一章現代國家財政に於ける收入第二章租税・公債の經濟的作用の相異第三章租税政策決定の基礎條件 — 租税原則に就て第四章租税の種類と轉嫁・歸着の問題第五章所得税 附、本邦收益税に就て第六章相續税・經常財産税・臨時財産税第七章一般取引税・消費税の負擔、世界恐慌と關稅政策第八章世界經濟恐慌と財政の一般的關係第九章恐慌期に於ける租税・公債政策の意義。

* 日本財政批判會編 **赤字財政とその將來** (昭八・二、曉書院、四六判序及目次一〇頁、本文二九〇頁、表、葉、*Table*) 「何故に、我々はかくも巨大な赤字財政を持つべく餘儀なくされたか、また何故に我國は今や、その赤字財政のために彼の前途を憂慮されねばならぬ破

目となつたか、そしてこの赤字財政の將來如何、これが我々の理解せんと企てた點である。(序)五篇にわかも、漫性化する赤字財政、赤字時代の財政經濟政策、軍備と軍事費深、刻化する公債問題、大増税への道とする。

* 臺灣總督官房調査課編 **領蘭印度主要租税關係法規** 南支那及南洋調査第二三輯 (昭八・七、菊判一六八頁、非賣品) 蘭領印度政府年鑑一九三三年版第一卷附錄各種現行法規中主要なるものを翻譯し、その後の官報によつて修正をくはへたもの。蘭領印度に企業を經營する邦人の參考に資せんことを志してゐる。

内務省地方局編 **地方財政概要** 昭和七年度 (昭八・一、四六倍判一〇三頁、非賣品)

* 滿鐵經濟調查會編 **滿洲國現行內國稅稅率表** — 昭和七年十二月一日現在 — (昭八・一、菊判六二頁、賣品) 昭和七年十二月一日現在としては、省は租稅權を持しぬ筈であるが、省稅の項を設けて現行のまゝを示し、省說の一部は國稅となり、一部は縣市稅となるべきを豫想する。

* 鐵道省經理局編 **國有鐵道會計一覽** (昭八・七、四六倍判七一頁、非賣品) 第一表より第十七表の諸指數まで。明治二十三年度以降のものがあるが、明治四十二年度以降のものの一表を占む。

* 大藏省理財局編 **國債額明細表** (昭八、菊判一二頁、非賣品)

* 藤塚林平 **酒稅法** (昭八、文精社書店四六判四九七頁、*Table*)

* 田中秀吉 **稅の知識** (昭八、實文館、四六判〇五頁、*Table*)

* 内海朝次郎 **通信特別會計の生れる迄** (昭八、交通經濟社出版部、四六判三七九頁、*Table*)

* 永安百治 **地方財政調整論** (昭八、良書普及會、菊判一六七頁、*Table*)

* 帝國農會調查部編 **農業者と營業者の租稅公課負擔比較調査** (昭八、菊判二四頁、品)

* 第一旅行調查部編 **昭和七年度並昭和八年度豫算及公債に付きて** (昭八、菊判二四〇頁、非賣品)

神戸正雄 インフレーション財政策（經濟論叢、三六卷一號）

神戸正雄 農業者と商工業者との租税負擔の均衡（經濟論叢、三六卷二號）

神戸正雄 法人所得の累進課税（經濟論叢、三六卷三號）

神戸正雄 郵便料の引上（經濟論叢、三六卷四號）

神戸正雄 現下の財政諸問題（エコノミスト、一一卷九號）

神戸正雄 異常所得の課税（經濟論叢、三六卷六號）

神戸正雄 潜税（隠然たる租税）に就きて（經濟學論叢、三六卷六號）

神戸正雄 織物消費税に就きて（經濟論叢、三七卷二號）

神戸正雄 地租改造の一案（經濟論叢、三七卷四號）

神戸正雄 營業收益税改造の一案（經濟論叢、三七卷五號）

小川郷太郎 昭和八年度豫算より觀たる

財政計劃（經濟論叢、三六卷五號）

小川郷太郎 日本財政の根本欠陥（タイムズ、二二卷一四號）

小川郷太郎 赤字豫算を検討す（經濟仕來、八卷一〇號）

米原七之助 コルムの財政學說の吟味（九州帝大經濟學研究、三卷一號）

米原七之助 財政社會學の最近の傾向（九州帝大經濟學研究、三卷二號）

大内兵衛 公債九〇億—その經濟的意義（改造、一五卷一號）

大内兵衛 フランスのインフレーションとデバリユエーションの財政的效果（經濟學論叢、三卷一〇號）

阿部賢一 増税の必然と税制改革の方向（早稻田政治經濟學雜誌、二九）

阿部賢一 財政任務の一轉換（早稻田政治經濟學雜誌、三一）

阿部賢一 赤字豫算の進行（改造、一五卷一〇號）

阿部賢一 軍事公債論（經濟仕來、八卷一一號）

土方成美 軍國豫算か、匡救豫算か（改造、一五卷三號）

土方成美 不生産公債の發行と増税（東洋經濟新報、一五六六）

汐見三郎 地方財政の改革（經濟論叢、三六卷一號）

汐見三郎 我國の所得税の發達（經濟史研究、四一號）

汐見三郎 地方財政調整交付金を批判す（經濟論叢、三六卷三號）

汐見三郎 企業と租税負擔（經濟論叢、三七卷四號）

難波田春夫 獨逸財政難と赤字補填策（ダイヤモンド、二二卷一號）

青木得三 衆議員通過の軍事豫算に就て（國際知識、一三卷三號）

青木得三 陸海軍費の財源を論ず（外交時報、六五卷六號）

井藤半輔 租税公債に代る新財政形態（エコノミスト、一一卷七號）

牧野輝智 財政の現状と其の今後並に經濟界への影響（講演二〇三）

牧野輝智 財政の現状と其の今後並に經濟界への影響（大阪銀行通信録、四二五）

小山田小七 豫算制度の改善（經濟時報、五卷四號）

花戸龍藏 所謂分配關係不可變の課税原理 (國民經濟雜誌、五五卷二號)

花戸龍藏 官房學者の租税論に於ける國庫收入主義 (國民經濟雜誌、五五卷四號)

山下覺太郎 イエヒト・財政の場所 (國民經濟雜誌、五四卷二號)

山下覺太郎 米國に於ける無税都市 (國民經濟雜誌、五五卷二號)

大谷政敬 イエヒト氏の財政型態論 (二)(三)(立命館學叢、四卷六、八號)

大谷政敬 公債國家論 (立命館學叢、五卷二號)

藤野惠 改正罹災救助基金法の運用に就て (二)(自治研究、九卷一、二號)

藤野惠 地方社會事業費に關する再檢討 (二)(自治研究、九卷五號)

高木壽一 本邦財政インフレーションの基本問題 (エコノミスト、一一卷九號)

高木壽一 ソヴェート租税政策概説 (三田學會雜誌、二七卷一〇號)

北崎進 赤字公債に關する一考察 (政經論叢、八卷二號)

北崎進 相續税の國際重複課税並にその回避法 (經濟法律論叢、三卷二號)

大山數太郎 越後天領に於ける幕末期の

田租徵收成績 (經濟史研究、四一號)

丸谷萬市 景氣政策としての租税政策 (國民經濟雜誌、五四卷三號)

船田 勇 外國船舶の所得税及營業收益税免除 (會計、三二卷六號)

船田 勇 所得税法と所得税令との比較問題 (會計、三三卷四號)

田中二郎 公法判例研究 (昭和七年度) 一〇不動産取得税賦課權の消滅時效の始期 (國家學會雜誌、四七卷六號)

三、谷道磨 國家の相續權 (經濟論叢、三七卷二號)

三、谷道磨 附與の合算課税 (經濟論叢、三七卷三號)

名和統一 サヴェート聯邦に於ける統一財政計劃に就て (經濟時報、五卷五號)

大村清一 昭和七年地方財政の回顧 (自治研究、九卷一號)

藤谷謙二 地方財政調整交付金案に就いて (經濟時報、四卷一〇號)

藤谷謙二 地方財政最近の動向 (經濟時報、四卷一二號)

藤谷謙二 大阪市債の發達 (經濟時報、五卷六號)

高島佐一郎 インフレーションの必然と

租税政策の動向 (東洋經濟新報、一五四五)

佐伯玄洞 英米兩國所得税の特徴 (經濟論叢、三六卷五號)

佐伯玄洞 米國に於ける所得税の發達 (經濟史研究、四四號)

佐伯玄洞 所謂「賣上税」に就いて (經濟論叢、三七卷二號)

武藏太郎 激動機の經濟相「公債」一本槍 (中央公論、四八卷二號)

增井幸雄 ジ・ベ・セイの租税論 (三田學會雜誌、二七卷一一號)

潮川次郎 非常時豫算の全貌 (同志社論叢四〇)

太田正孝 國防豫算の左右前後 (エコノミスト、一一卷一九號)

豐崎稔 増税と景氣轉換 (經濟往來、八卷一一號)

高砂恒三郎 地方財政調整問題 (經濟時報、五卷一號)

高砂恒三郎 地方財政調整から觀た兩税及所得税委讓問題 (經濟時報、五卷七號)

勝正憲 増税か公債か (エコノミスト、一一卷一七號)

中島賢藏 地方税制の改革就て (自治研究、九卷九號)

永安百治 地方財政・調整交附金制度に就

て（自治研究、九卷二號）

山口壽吉 部落費に就て（自治研究、九卷二

號）

檜崎敏雄 スノウデンを清算す（經濟商業

論叢、一）

松浦要 佛蘭西十八世紀前半に於ける筆

禍租稅論三書（經濟商業論叢、二）

竹原寅之助 印度保護關稅の財政的地位

（國民經濟雜誌、五四卷三號）

長守善 インフレ時代の佛國財政（ダイヤ

モンド、二二卷七號）

蠟山政道 公企業と特別會計（國家學會雜

誌、四七卷二號）

大竹虎雄 國費と地方費（一〇）（自治研究、

九卷二號）

柏井象雄 獨逸及佛蘭西の所得稅（經濟論

叢、三六卷三號）

岩野晃次郎 戦後に於けるフランスの公

債政策とインフレーション（經濟學論叢、

二卷三、四號）

竹中龍雄 通信事業特別會計に就て（經

濟時報、五卷二號）

堀眞琴 ファツシスト財政々策の基調

（外交時報、六六卷三號）

陶山誠太郎 Land Valuation Maps に就

て（經濟時報、五卷二號）

伊藤武夫 緊急銀行法とアメリカ國債

（大阪銀行通信錄、四三〇）

岡野文之助 東京市區財政の現状と其の

問題（都市問題、一七卷一號）

米國各州に於ける昨年中のガソリン稅

（帝國鐵道協會々報、三四卷六號）

土屋喬雄 明治初年の注目すべき地租改

正論（經濟學論叢、三卷六號）

三好重夫 英國に於ける國庫交附金制度

（自治研究、九卷七、八號）

石渡莊太郎 課稅所得としての一時の所

得（自治研究、九卷八號）

香川信次 銀行關係の印紙稅に就て

（銀行通信錄、五七）

桶田定吉 銀行關係の直接稅に就て（銀

行通信錄、五七）

宮澤俊義 地方稅の徵收義務者の責任

（自治研究、九卷一〇號）

藤野 清 本邦工業助長策としての免稅

（商業論叢、八卷二號）

松野賢吾 モンペルト「財政學」（長崎高商

研究信報、二二卷一、二、三、四、五、六號）

一七四

松野賢吾 財產稅の基礎概念（商業と經濟、

一四卷一號）

青柳篤恒 滿洲國財務行政の統一（外交時

報、六五卷三號）

木村増太郎 滿洲國財政管見（東亞經濟研究、

一七卷三號）

德永清行 彩票に就て（山口高商調查時報、五

卷一號）

德永清行 滿洲國財政現況（東亞經濟研究、

一七卷二號）

概 觀

經濟學史研究では、上田辰之助教授の「聖トマス經濟學」をもつて、今年度の異彩とする。堀經夫博士および吉田秀夫教授の前からの繼續的研究は、それぞれ一冊づつのかつちりした書冊となつて學界におくりだされてゐる。經濟哲學と稱せられる研究では、杉村廣藏教授の非常によくまとまつた一書と、高木友三郎博士の壯大なる一構圖があらはれた。しかし、中山伊知郎教授の「純粹經濟學」のごとく、學界の賞讃同時に一般の歡迎をうけたものはない。この著作の成功を通してこの國の經濟學の動向著一應察知される。しかも一方には高田保馬博士の非常に集約的な新著「經濟原論」が、それと照應するあり、雜誌論文を見わよめられざるをえない。最も多く筆をついた高田、栗田、栗村の諸學者は、いづれもおなじ系統の人々とみとめられるのである。

解題者附記。

論作の内容にふれることは、このたびも單行本にかぎつた。雜誌論文についても試みたのであるが、簡潔に要旨をとりまとめることが屢々困難で、全体に繁簡のつりあひを得がたいことを見いだしたので、その方の原稿を廢棄した。

單行本については時に解題の域をこえたところもある。解題としての体裁をはなはだしく毀損してゐなければ幸であり、本解題の最大多數の讀者たる學生諸君にとつて、多少の興味となれば望外である。

雜誌論文題目の並べ方は、一部は執筆者を標準とし、一部は項目を標準とした。前者を標準とすることが後者を標準とする結果に合致することがあるのは自然である。

「經濟學」における項目の區分は、漠然としてゐるが、利用者にとつて多少便利となるであらうと信じられるやうな仕方である。おこなはれてゐる。*印によつて行間をあけてゐるのは、いづれもその意味である。それがいかなる區別であるかは、それぞれ讀者の判定にゆだねられる。

經濟理論を主とし、前年度において包括されてゐた社會主義的・一般社會論的文獻

は、排除されないまでも、制限された。單行本にしてすでに權威ある紹介批評のあるものについて、その所在および要点を示すべくこころみすることは、前年度の本解題が企及しえなかつたところである。このたびは、十分満足な形においてではないが、その企圖に一步をすゝめてゐる。

「財政學」の部門に屬すべき土方・沙見兩博士の國民所得に關する二著を、「經濟學」の部門に收めたために、一見して、「財政學」の部門をさびしくしたことに ついては、讀者の諒解をもとめたい。

單行本にして解題者の接見できなかったもののうち、林要著「貨幣のない社會」および手塚壽郎譯ワルラス「純粹經濟學要論」、小島昌太郎譯ジンバルト「三つの經濟學」の兩譯書を十分紹介できなかったことは、最も残念とするところである。